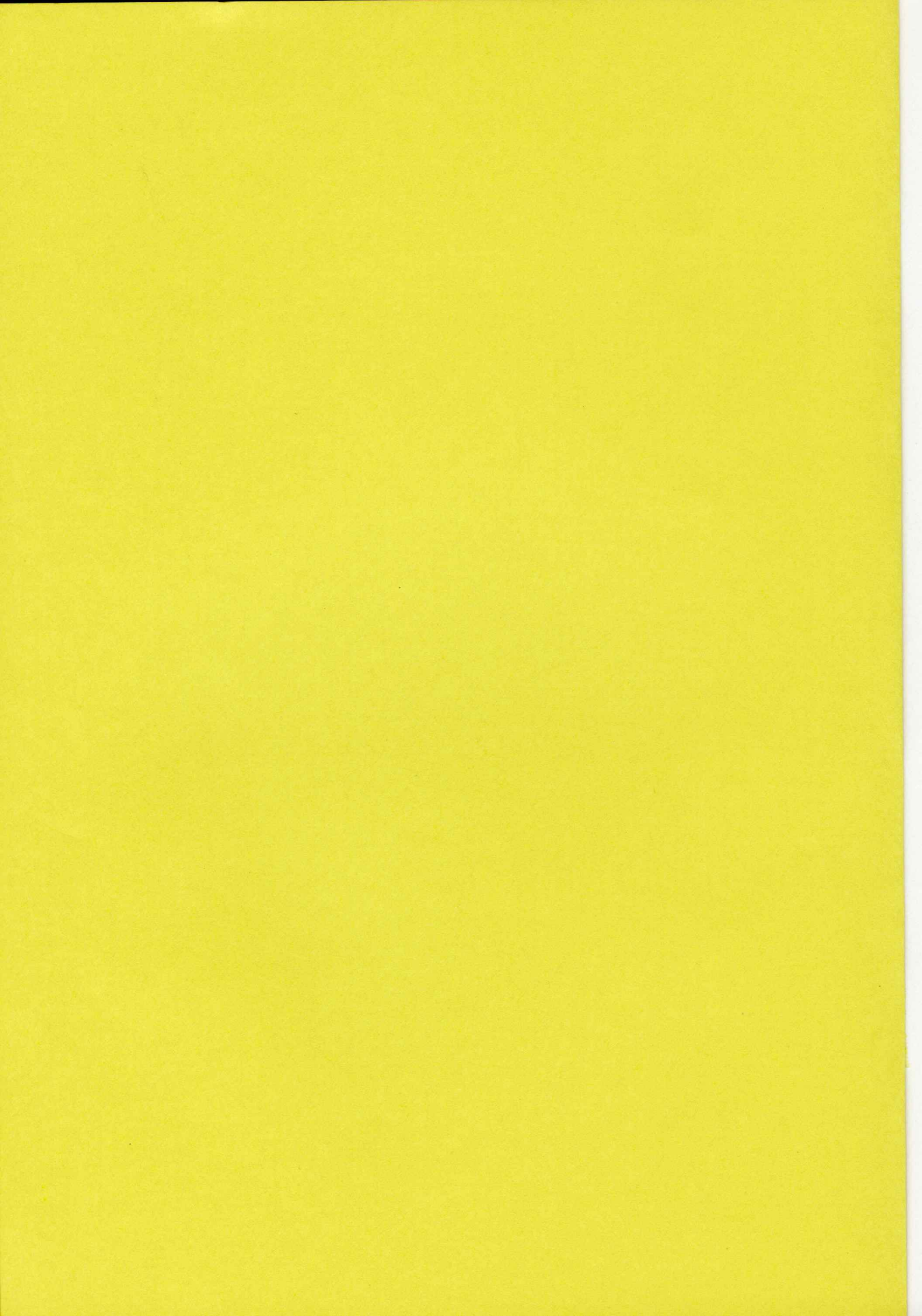


みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報

昭和54年度

CHIBA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



ごあいさつ

千葉県立美術館は、昭和49年10月に開館して以来、関係者の協働力・協賛により「みる・かかるとつくる」を通じて、市民の文化・芸術の向上に大いに寄与してまいりました。昨年度は、「浮城記奇談」をテーマにした展覧会を開催し、市民の関心を高め、多くの作品を展示しました。また、市民の文化・芸術の向上に大いに寄与してまいりました。



美術館全景

01	 前 言	01	 前 言
02	 寄 詞	02	 寄 詞
03	 開 館	03	 開 館
04	 展 覧	04	 展 覧
05	 展 覧	05	 展 覧
06	 展 覧	06	 展 覧
07	 展 覧	07	 展 覧
08	 展 覧	08	 展 覧
09	 展 覧	09	 展 覧
10	 展 覧	10	 展 覧
11	 展 覧	11	 展 覧
12	 展 覧	12	 展 覧
13	 展 覧	13	 展 覧
14	 展 覧	14	 展 覧
15	 展 覧	15	 展 覧
16	 展 覧	16	 展 覧
17	 展 覧	17	 展 覧
18	 展 覧	18	 展 覧
19	 展 覧	19	 展 覧
20	 展 覧	20	 展 覧
21	 展 覧	21	 展 覧
22	 展 覧	22	 展 覧
23	 展 覧	23	 展 覧
24	 展 覧	24	 展 覧
25	 展 覧	25	 展 覧
26	 展 覧	26	 展 覧
27	 展 覧	27	 展 覧
28	 展 覧	28	 展 覧
29	 展 覧	29	 展 覧
30	 展 覧	30	 展 覧
31	 展 覧	31	 展 覧
32	 展 覧	32	 展 覧
33	 展 覧	33	 展 覧
34	 展 覧	34	 展 覧
35	 展 覧	35	 展 覧
36	 展 覧	36	 展 覧
37	 展 覧	37	 展 覧
38	 展 覧	38	 展 覧
39	 展 覧	39	 展 覧
40	 展 覧	40	 展 覧
41	 展 覧	41	 展 覧
42	 展 覧	42	 展 覧
43	 展 覧	43	 展 覧
44	 展 覧	44	 展 覧
45	 展 覧	45	 展 覧
46	 展 覧	46	 展 覧
47	 展 覧	47	 展 覧
48	 展 覧	48	 展 覧
49	 展 覧	49	 展 覧
50	 展 覧	50	 展 覧
51	 展 覧	51	 展 覧
52	 展 覧	52	 展 覧
53	 展 覧	53	 展 覧
54	 展 覧	54	 展 覧
55	 展 覧	55	 展 覧
56	 展 覧	56	 展 覧
57	 展 覧	57	 展 覧
58	 展 覧	58	 展 覧
59	 展 覧	59	 展 覧
60	 展 覧	60	 展 覧
61	 展 覧	61	 展 覧
62	 展 覧	62	 展 覧
63	 展 覧	63	 展 覧
64	 展 覧	64	 展 覧
65	 展 覧	65	 展 覧
66	 展 覧	66	 展 覧
67	 展 覧	67	 展 覧
68	 展 覧	68	 展 覧
69	 展 覧	69	 展 覧
70	 展 覧	70	 展 覧
71	 展 覧	71	 展 覧
72	 展 覧	72	 展 覧
73	 展 覧	73	 展 覧
74	 展 覧	74	 展 覧
75	 展 覧	75	 展 覧
76	 展 覧	76	 展 覧
77	 展 覧	77	 展 覧
78	 展 覧	78	 展 覧
79	 展 覧	79	 展 覧
80	 展 覧	80	 展 覧
81	 展 覧	81	 展 覧
82	 展 覧	82	 展 覧
83	 展 覧	83	 展 覧
84	 展 覧	84	 展 覧
85	 展 覧	85	 展 覧
86	 展 覧	86	 展 覧
87	 展 覧	87	 展 覧
88	 展 覧	88	 展 覧
89	 展 覧	89	 展 覧
90	 展 覧	90	 展 覧
91	 展 覧	91	 展 覧
92	 展 覧	92	 展 覧
93	 展 覧	93	 展 覧
94	 展 覧	94	 展 覧
95	 展 覧	95	 展 覧
96	 展 覧	96	 展 覧
97	 展 覧	97	 展 覧
98	 展 覧	98	 展 覧
99	 展 覧	99	 展 覧
100	 展 覧	100	 展 覧



目 次

ご あ い さ つ.....	1
沿 革.....	2
管 理 運 営.....	3
機 構.....	5
施 設.....	10
事 業 報 告.....	15
常 設 展.....	17
特 別 展.....	19
企 画 展.....	26
千葉県芸術祭.....	34
団 体 展.....	36
教育・普及.....	41
昭和54年度事業一覧.....	50
利 用 状 況.....	52
日 誌 抄.....	53
関 係 令 規.....	54

ごあいさつ

千葉県立美術館は、昭和49年10月に開館して以来、関係者各位の御協力・御支援により“みる・かたる・つくる”をモットーに大衆化に努力してまいりました。

昨年度は、「芹沢銈介展」をかわきりに「房総を訪れた巨匠たち」・「水彩画の再発見」などの特別展をはじめ、企画展・常設展・団体展を開催し、年間142,969人もの入館者を得ることができ、地域の美術館として、やっと定着してきたと自負しております。今後も、さらに反省を加え、より充実した美の広場としての活動をしていきたいと考えております。

さらに、昭和54年度は、本館にとって飛躍の契機となるべき県民アトリエが竣工し、また美術品取得基金条例が制定されました。

県民アトリエは、“かたる・つくる”の拠点として、作品制作の喜び・楽しみ、また美術の見方・考え方を深めるための活動を企画し、運営して行きたいと考えております。

一方、資料収集につきましては、地域に根ざした美術館を基本としながら、日本近代美術史の宝庫をめざして、より一層収蔵作品の充実を図るため、調査研究と収集を行っていく所存であります。

昭和55年度は、本館にとって、さらに飛躍せねばならない年であります。今後とも、関係機関・団体ならびに県民の皆様のお一層の御協力と御支援をお願いする次第です。

昭和55年6月

千葉県立美術館長

高橋 在久

沿革

概要

千葉県立美術館は、昭和43年にまとめられた県立博物館設置構想に基き、建設計画をすすめ、昭和48年4月教育庁文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたった。同49年3月第1期工事の展示棟が完成し、4月1日千葉県立美術館として機関設置し、10月23日開館式を挙げ、一般公開を始めた。同51年2月第2期工事の管理棟が完成した。

なお、千葉県の第5次総合5ヶ年計画により、第3期工事として、県民アトリエの建設に昭和54年3月27日着工、同55年2月29日竣工し、ここに当初建設計画は完了した。

運営方針

- 県民のための美術館として、明るい親しまれる美術館。
- 学校教育・社会教育との関連から、教育普及活動を重視し、楽しく学べる美術館。
- 県民と美術家との交流の広場とし、相互の理解と向上を図る美術館。
- 房総の地にかかわりのある作家の作品と、関係資料の収集と研究をめざす美術館。
- 美の広場として、広く美術資料・情報等を収集し、みる・かたる・つくる活動を総合的に展開する美術館。

昭和44年12月9日 第1回千葉県立美術館建設懇談会が開かれる(委員15名)

昭和45年1月19日 県立美術館建設の請願書が2月県議会で採択される

昭和45年7月24日 建設地として千葉公園に内定する

昭和45年11月12日 第1回美術館設置準備専門委員会が開かれる(委員10名)

昭和46年3月31日 千葉公園敷地の美術館基本構想成る

昭和46年6月24日 体育館移転問題等で千葉公園内建設が不可能となる
代案として千葉中央港埋立地が提示される

昭和47年1月5日 建設地を千葉中央港の埋立地に決定し、使用について開発庁長と教育長で覚書を交換する

昭和47年3月31日 基本設計完了する 株式会社大高建築設計事務所

昭和47年7月31日 展示棟 第1期工事 の実施設計完了する

昭和47年10月13日 展示棟建築工事請負契約議案可決される

昭和47年12月10日 展示棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和48年4月1日 文化課に美術館準備班を置き、開館事務にあたる

昭和48年11月30日 管理棟 第2期工事 の実施設計完了する

昭和49年3月31日 展示棟建築工事竣工

昭和49年4月1日 千葉県立美術館発足する職員14名

昭和49年10月23日 開館記念式典を行なう

昭和49年10月24日 開館記念展「千葉県美術展覧会」を開催 一般公開を始める

昭和50年3月13日 管理棟建築工事請負契約議案可決される

昭和50年3月15日 管理棟建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和51年2月15日 管理棟建築工事竣工

昭和51年3月2日 管理棟完成記念特別展「浅井忠とその師弟展」を開催する

昭和51年6月7日 寄付によって、正面玄関に植栽を行なう

昭和52年3月12日 彫刻の屋外展示をはじめる

昭和52年4月10日 展示棟の一室に美術普及室を開設する

昭和53年1月18日 外構工事として、駐車場が拡張され、101台の収容となる

昭和53年2月21日 美術普及棟の準備会が発足する

昭和53年10月17日 債務負担行為によって美術普及棟建築予算がつく

昭和53年11月18日 浅井忠像 完成除幕式

昭和53年11月30日 美術普及棟実施設計完了する

昭和54年1月8日 美術普及棟を県民アトリエと改称する

昭和54年3月5日 県民アトリエ建築工事請負契約議案可決される

昭和54年3月22日 県民アトリエ建築工事着工(管理・大高建築設計事務所、施工・株式会社竹中工務店)

昭和55年2月29日 県民アトリエ建築工事竣工

昭和55年3月16日 県民アトリエ完成記念講演会

管理運営

定員数6) 課長1、主任主事2、技師1、運転手1、用務員1

- 本館の収蔵品及び保存に関すること。
- 職員の人事・給与に関すること。
- 館員の給与・賞与に関すること。
- 予算の編成・執行に関すること。
- 物品の仕入・保管料等の徴収に関すること。
- その他本館の業務全般に関すること。

開館以来、5年余を経過して、本館の活動もやっと県民の中に定着してきた。入館者も、年々着実に増加してきている。

施設は、待望の県民アトリエが昭和55年2月に竣工し、当初の建設計画が完了した。この県民アトリエは、「みる」だけではなく「かたる・つくる」の活動を目ざす本館の特色を示すものであり、今後の活動にその責任を感じている。

現在、本館に残された問題は、平日の交通の便である。幸いにして日曜・祭日には直通バスが運行され利用度を高めている。今後とも平日の直通バス運行に対し、一層の努力をしていくつもりである。

美術館資料の収集も、順調な伸びを示しているが、本年度には美術品取得基金条例が定められ、昭和55年度より実施されることとなった。この基金により、より充実した資料収集を図ることができるものと期待は大きい。

千葉県立美術館協議会(10)

協議会の活性化を図るため、館長の諮問機関として置かれた。学校教育、社会教育の関係者並びに学識経験者の中から10名を教育委員会が任命している。

千葉県美術館資料審査委員会(15)

収集する美術資料の適否及び評価を適宜かつ円滑に行うため置かれた。委員は専門(日本画、洋画、彫刻、工芸、書等)を専攻し、15名を学芸員が充任している。

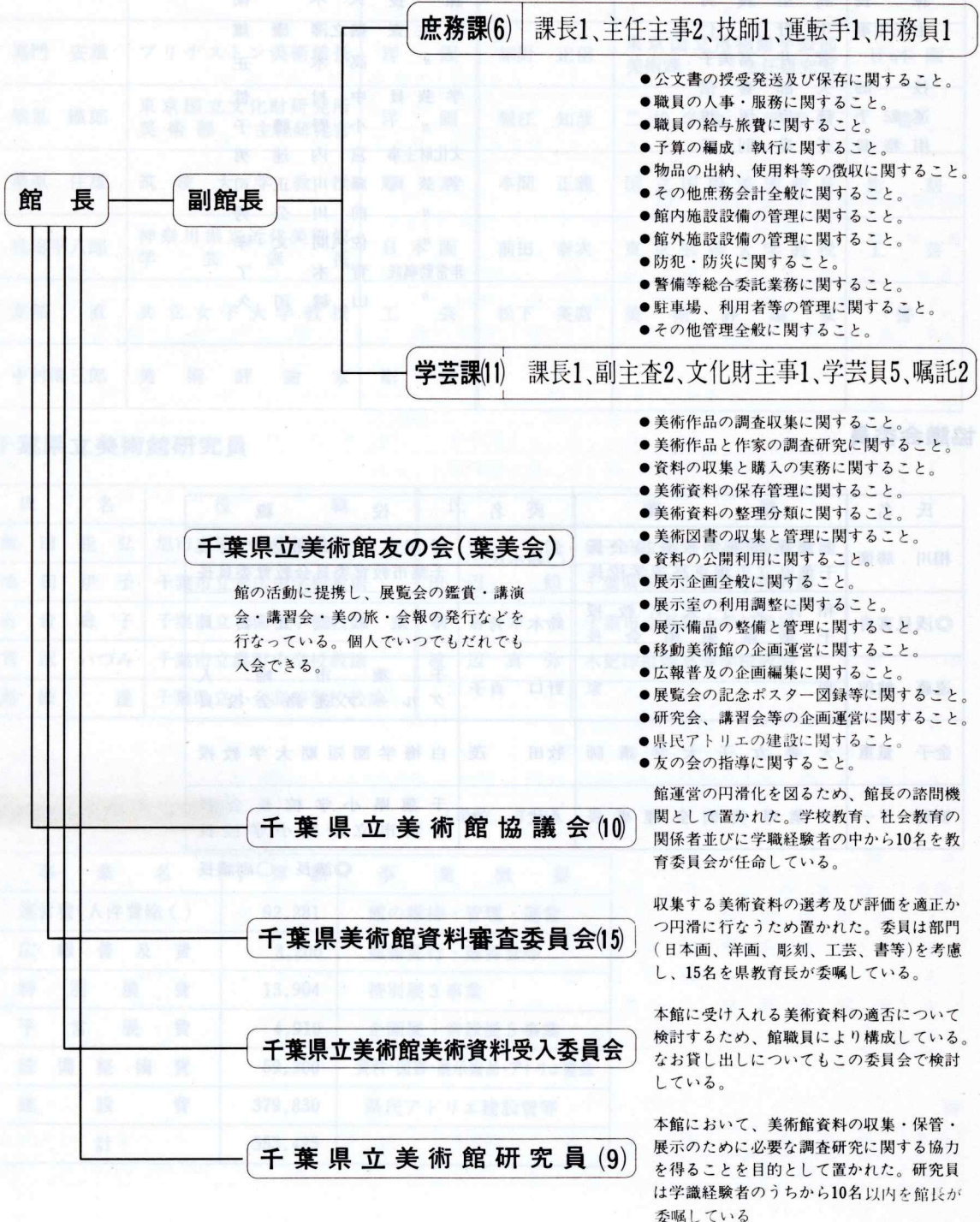
千葉県立美術館美術資料受入委員会

本館に受け入れる美術資料の適否について検討するため、協議会により構成している。なお貸し出しについてもこの委員会で検討している。

千葉県立美術館研究員(9)

本館において、美術館資料の収集・保管・展示のために必要な調査研究に関する能力を高めることを目的として置かれた。研究員は学識経験者の中から10名以内を館長が任命している。

組織および事務分掌（55.3.31現在）



職 員

館 長 市 原 正 夫
副 館 長 高 橋 在 久

庶務課

課 長 高 梨 義 男
主任主事 川 野 仁
" 菅 井 富美子
技 師 矢 部 喜 信
運 転 手 篠 原 恒 雄
用 務 員 長 島 則 子

学芸課

課 長 大 木 衛
副 主 査 鶴 之 澤 康 雄
" 高 木 正
学 芸 員 中 村 哲
" 小 野 禮 子
文化財主事 宮 内 速 男
学 芸 員 藤 川 正 司
" 前 川 公 秀
" 佐 久 間 文 孝
非常勤嘱託 青 木 了
" 山 越 司 久

協議会委員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
相川 勝衛	千葉県高等学校長協会会長 千葉県立千葉東高等学校長	○鈴木民三	千葉県立美術館友の会長 千葉市教育委員会教育委員長
◎浅見喜舟	和 洋 女 子 大 学 教 授 千 葉 県 美 術 会 長	鈴木 秀一	千 葉 市 監 査 委 員
遠藤 健郎	画 家	野口 貞子	千 葉 市 婦 人 グ ル ー プ 連 絡 会 役 員
金子 量重	大 妻 女 子 大 学 講 師	牧田 茂	白梅学園短期大学教授
笹岡 了一	千 葉 県 美 術 会 理 事 長	八代 進	千 葉 県 小 学 校 長 会 長 千 葉 市 立 新 宿 小 学 校 長

◎議長 ○副議長

千葉県美術館資料審査委員会委員

氏 名	役 職	部 門	氏 名	役 職	部 門
植村鷹千代	美 術 評 論 家	洋 画	久富 貢	跡見学園女子大学教授	日 本 画
金子 量重	大妻女子大学講師	工 芸	平野元三郎	千 葉 県 嘱 託	書
嘉門 安雄	ブリヂストン美術館長	洋 画	細野 正信	東京国立博物館学芸部 美術課 主任研究官	日 本 画
陰里 鐵郎	東京国立文化財研究所 美術部 主任研究官	洋 画	堀江 知彦	二松学舎大学教授	書
桑原 住雄	筑波大学教授	彫 刻	本間 正義	国立国際美術館長	彫 刻
弦田平八郎	神奈川県立近代美術館 学 芸 課 長	日 本 画	前田 泰次	東京芸術大学教授	工 芸
友部 直	共立女子大学教授	工 芸	松下 英麿	美 術 評 論 家	書
中村傳三郎	美 術 評 論 家	彫 刻			

千葉県立美術館研究員

氏 名	役 職	氏 名	役 職
飯 田 能 弘	旭市立第一中学校教諭	辰 野 隆	銚子市立銚子西高等学校教諭
池 田 伊 子	千葉市立末広中学校教諭	田 辺 勉	千葉県立生浜高等学校教諭
石 倉 総 子	千葉市立花園中学校教諭	利 倉 栄 子	千葉市立幕張中学校教諭
岩 沢 いづみ	千葉市立轟町中学校教諭	渡 辺 真 弥	木更津紅陵高等学校教諭
高 橋 達	千葉県立小金高等学校教諭		

昭和54年度予算概要

(単位 千円)

事 業 名	予 算 額	事 業 概 要
運営費(人件費除く)	92,281	館の維持・管理・運営
広 報 普 及 費	3,200	館報発行・講習会等
特 別 展 費	13,904	特別展3事業
平 常 展 費	4,910	企画展・常設展5事業
設 備 整 備 費	59,300	資料・図書・展示備品・アトリエ備品
建 設 費	379,830	県民アトリエ建設費等
計	553,425	

収蔵資料

(昭和55年 3 月31日現在)

収蔵別内訳

種別	区分	保管換	購 入	寄 贈	合 計
日 本 画		2 3	2 5	4 3	9 1
洋 画		3 5	7 7	1 1 5	2 2 7
彫 塑		1 0	2 3	1 4	4 7
工 芸		9	2 9	1 4	5 2
書		1 4	1 3	7	3 4
版 画		3	7 4	3 6	1 1 3
合 計		9 4	2 4 1	2 2 9	5 6 4
研究資料		7 3	8 6	2 2 8	3 8 7

昭和54年度新収蔵作品一覧

日 本 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	後 藤 純 男	山 門 雨	昭49			購 入
2	東 山 魁 夷	春 雪	昭48	紙 ・ 着 彩	168.0×215.0	"

洋 画

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	鱈 利 彦	房 州 伊 豫 ケ 岳	昭45頃			寄 贈
2	石 井 柏 亭	晩 春 行 楽 図	昭13	紙 ・ 水 彩	65.0× 95.0	購 入
3	無縁寺 心 澄	医 大 尖 煙 突		"	58.9× 77.0	寄 贈
4	板 倉 鼎	金 魚 と 雲	昭 3	キャンバス・油 彩	79.5× 98.0	"
5	"	裸 婦	昭 4	"	79.0×115.0	"

彫 塑

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	木 村 賢太郎	う ごめく トルソー VI		石 彫	70.0	購 入
2	藤 野 天 光	銃 後 工 場 の 護 り	昭13	ブ ロ ン ズ	189.0	"
3	鈴 木 啓 子	F E E L I N G - 69	昭44	強化ポリエステル樹脂・木		"

工 芸

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	香 取 秀 真	鉄 瓶		鋳 金	20.0	購 入
2	香 取 正 彦	龍 銀 玉 錯 花 瓶	昭53	"	27.7	"
3	"	金 銅 魚 籃 観 音	昭50頃	"	36.0	"
4	香 取 秀 真	鳩 香 炉		"	15.0	寄 贈
5	"	鋳 鉄 茶 釜		"	17.0	"

書

番号	作 家 名	作 品 名	制作年	材 質・形 状	寸 法	受入方法
1	浅 見 錦 龍	九 十 九 里	昭35	紙 ・ 墨 書	202.0× 62.0	寄 贈

版 画

番号	作家名	作品名	制作年	材質・形状	寸法	受入方法
1	東山魁夷	リトグラフィ集「冬の詩」		リトグラフィ・紙	36.0×53.0	購入
2	浜口陽三	毛糸	昭53	銅版・紙	62.0×47.3	"
3	"	く る み	昭53	銅版・紙	62.0×47.8	"
4	星 裏一	雪 の 中 で (K)	昭35	木版・紙	53.7×70.0	"
5	"	雪 の 玉 A	昭39	"	58.0×58.0	"
6	"	星 座 二 番	昭40	"	58.0×43.0	"
7	"	星 座 No. 42	昭42	"	73.0×58.0	"
8	"	風景(A) - 星月夜二	昭45	"	43.0×58.0	"
9	"	赤い地平線	昭47	"	43.0×70.0	"
10	"	夜明け	昭50	"	47.8×91.7	"
11	"	王の樹	昭51	"	55.6×88.0	"
12	"	陽 (林)	昭53	"	31.0×93.0	"
13	"	野の木(A)	昭53	"	55.3×71.0	"

研究資料

番号	資	料	名	受入方法
1	木下藤次郎資料	スケッチブック		寄贈
2	"	葉書(荒谷直之介宛)		"
3	宮崎丈二資料	油彩画「風景」	23.9×33.0 大8	"
4	"	" 「自画像」	33.1×23.7 大12	"
5	"	" 「風景」(小笠原母島にて)	24.0×33.0 大12	"
6	"	" 「風景」(信州葛温泉にて)	23.9×32.9 昭16	"
7	"	" 「風景」(秋田県下川村にて)	23.7×23.1 昭21	"
8	"	" 「リングと甘橘」	27.2×40.8 昭25	"
9	"	" 「いちご」	19.0×33.4 昭26	"
10	"	" 「ダリアとりんご」	60.5×50.0 昭26	"
11	"	" 「冬の丘」	50.5×61.0 昭27 (昭和42年12月加筆完成)	"
12	"	" 「向日葵」	45.5×37.8 昭27	"
13	"	" 「りんご」	24.3×33.1 昭29	"
14	"	" 「桃」	38.0×45.5 昭33	"
15	"	" 「果物」	32.0×41.0 昭34	"
16	"	" 「柿」	38.0×45.8 昭34~35	"
17	"	" 「猫(チイコ)」	24.2×33.0 昭35	"
18	"	" 「桃」	31.8×41.0 昭35~36	"
19	"	" 「チューリップ」	27.4×22.1 昭41	"
20	"	" 「菊」	33.3×24.2 昭42~43	"
21	"	" 「ひなげし」	45.5×37.7 昭43	"
22	"	" 「風景」	33.4×45.3	"
23	"	" 「江古田風景」	40.0×52.5	"
24	"	" 「裸婦」	22.2×27.3	"
25	"	" 「アマリリス」	24.2×33.3	"
26	"	素描集(1)		"
27	"	" (2)		"
28	"	" (3)		"
29	"	" (4)		"
30	"	" (5)		"
31	"	" (6)		"
32	"	" (7)		"
33	"	" (8)		"
34	"	" (9)		"
35	"	" (10)		"

施 設

この建物は、幾つかの建設候補地の中から、千葉港に隣接した臨海埋立地の一角に計画された。計画着手時はこの付近は訪れる人も少なく、海を通して石油基地のタンク群や工場と煙を吐き出す煙突が望める環境であった。

このような当初の環境下で、空気汚染、降下媒塵そして塩害など、建物に与える悪影響が予測されるために、材料の選択、構法、空調計画等は十分な検討がなされた。以下、主な部分について記す。

外壁の打込みタイル-先積ブリック構法

従来の外壁をコンクリートで表現している建物とは異なり、珧器質タイルを型枠代にしてコンクリートと一体に打ち込む構法をもちいた。

今回使用したタイルは従来の断面と異なり、コの字型の断面をしており、型枠にセットせずモルタルにて積上げられるように見込み寸法を5cmの厚味にしてある。

施工方法は、内型枠、配筋工程の次のタイルを積み5段毎に型枠のホームタイを通し、2.400mm程度まで積み上げ単管にて固定する。この2.400mmの高さは、設計段階での試作実験にて安全を確認した数値である。試作段階での支保工は、縦方向に角材を400ピッチに通し、横方向に単管を480ピッチに通し固定したが、施工時は、縦方向に単管を480ピッチに通して固定した。コンクリートの打設は、1.5m~2.0m/hの速度を目標に行ない、ポンプにて打設可能な程度までスランプを下げた。この工程を繰返しタイル壁面を構成してゆく。

タイル面の施工時の汚れ防止には、ふのりを塗布した。タイルの目地は積み上げる工程で仕上げられ、表面に現われない目地の空隙にコンクリートのノロがしみ込んでゆき、目地からの滲透水を防ぎ満足する状態に仕上がった。

屋根の天然スレート

前述のような環境のもとで、勾配屋根に適し、十分にもちこたえられる材料としては耐候性鋼等が考えられたが調査の結果により天然ストートを使用した。

空調計画

計画当初より、良好とはいえない外部環境から美術品をいかに保護するかが、海浜に建つ美術館として、ひとつの重要なテーマだった。外気取入れは、内部に自動巻取りフィルター、ユニット型フィルター、活性炭フィルター、キャピラリーワッシャーの4種類の空気清浄フィルターを組込んだ外気処理器を通して供給

されている。

展示棟はCAV(定風量型)+VAV(可変風量型)方式により計画されている。わが国の美術館は、平常の館内利用者に対して特別展や団体展等のときに非常に利用者がふえて、発熱負荷の変動が大きくなる。VAV方式は、こういった条件に対して非常に効果的であるといえる。

管理棟は、エネルギーの省力化にも役立つVAV方式を採用し、収蔵庫は、露点再熱制御方式により二つの条件の異なる収蔵庫を2台の空調機で空調されている。

照明計画

展示壁面は、自然光源と人工光源とにより全体計画されている。

自然光源は展示室の高窓から取り入れられ、外部の溝型ガラスと内部の紫外線吸収のアクリル拡散板を経て壁面に達する。しかし、太陽直射光の鉛直面照度は8時から15時の間で10%の時間が80.000lx以上、30%の時間が50.000lx以上、50%の時間が25.000lx(平均)以上、90%の時間が5.000lx以上という測定値がありまた水平面照度にしても50.000lx(薄晴)から5.000lx(曇天)の範囲と非常に明るい。このように必要以上に明るい光源は、調光通路内に設けられた2枚の電動スクリーン(これは、計算値により鉛直面照度60.000lx以上の条件のとき必要な枚数で、それぞれ異なった透過率を有する布を使用した)にて基準の壁面照度になるよう調光される。

計算値による透過率をもつクロスでの何回かの現場実験の結果、クロスは白地のポリエステル(透過率53.6%)と黒地のジョーゼット(透過率35%)の2枚を採用した。ここで留意すべき点は、クロスの遮光性能を良くするために、厚地の布や、コーティングされた布を使用すると壁面に色がつくことがある。壁面の照度分布の状態は、視覚的に均一な壁面が確保できた。

曇天・雨天に対しては、蛍光灯と白熱灯を補助照明として設置した。蛍光灯と白熱灯を併用したのは、演色性を高めるためである。

第1、2展示室は、すべて蛍光灯と白熱灯による人工光源で計画されている。壁面照度は、最高200lxに押えてある。

固定ケースは基準照度を180lxに設定した。照明方法は、全面アルミルーバーの天井ふところに蛍光灯を2本並列させ、その間に白熱灯2個を配置した。

【設計監理者】

建築：大高建築設計事務所

構造：木村俊彦構造設計事務所

設備：科学応用冷暖研究所

備品：大高建築設計事務所

【施行者】

建築：(株)竹中工務店

設備：空調＝東洋熱工業(株)，衛生＝第一管工事(株)，

電気＝関東電気工事(株)

備品：天童木工，山口木材，佐々木ブラインド

【設計期間】

基本設計：昭和46年11月～昭和47年1月

実施設計：1期展示棟＝昭和47年7月～昭和48年1月

2期管理棟＝昭和48年7月～昭和48年11月

3期県民アトリエ＝昭和53年9月～昭和54年11月

【施工期間】

1期展示棟：昭和48年4月～昭和49年3月

2期管理棟：昭和50年4月～昭和51年2月

3期県民アトリエ：昭和54年3月～昭和55年2月

【階 数】

地下1階，地上2階，塔屋1階建

【高 さ】

基礎底まで：GL－5.00m，最高軒高GL＋9.33，最高高さ：GL＋15.20m

【都市計画地域指定】

用途地域：準工業地域

【規模・面積】

敷地面積：33,057.87㎡，建築面積：7,641.9㎡，建ぺい率：23.11%，延床面積：8,970.85㎡，展示棟＝5,194.59㎡，管理棟＝2,274.60㎡，県民アトリエ＝1,501.66㎡，駐車台数：101台

【構 造】

主体構造：鉄筋コンクリート造（プレストレスト導入），屋根：鉄骨造／主鋼材の種類：H型，山型，平鋼＝SS41および高張力鋼，PC鋼棒／コンクリートの種類：A種・普通コンクリート（基礎・地中梁・1階スラブ） $F_c=210\text{kg}/\text{cm}^2$ ，B種・軽量コンクリート（梁・スラブ用・地上部） $F_c=300\text{kg}/\text{cm}^2$ ，C種・軽量コンクリート（地上部躯体でA，B以外の注・壁など） $F_c=240\text{kg}/\text{cm}^2$

【外部仕上】

屋根：勾配屋根＝アスファルトルーフィング・コロシート，天然スレート3枚葺，陸屋根＝アスファルト防水，押えコンクリート，豆砂利打込み

外壁：珪質タイル（先積ブリック打込工法）一部コンクリート打放しおよび珪り仕上げに撥水剤塗布開口部：昭和鋼機(株)オーダーメイド自然発色サッシュ，一部型鋼グラファイト処理サッシュ，旭硝子スーパーサンゴールド

【内部仕上げ】

玄関ホール・ロビー・第7展示室：床・巾木＝自然

石（北木島御影）円盤摺および本磨，壁＝コンクリート砕り仕上げ，プラスター中塗下地塗装仕上げ，天井＝岩綿吸音板 天井高＝2,300 4,200～13,500

展示室：床＝ビニールホモジニアスタイル，壁＝石綿珪酸カルシウム，板下地クロス張り，塗装仕上げ 天井＝岩綿吸音板，塗装仕上げ 天井高＝3,600 3,240 4,500～6,100

事務室：床＝ビニールホモジニアスタイルおよびビニールアスベストタイル，壁＝プラスター中塗下地塗装仕上げ，天上＝岩綿吸音板塗装仕上げ，天井高3,400

収蔵庫：床＝フローリングブロック，壁・天井＝米杉 天井高＝3.400 館長・副館長室・応接室：＝じゅうたん，壁＝突板練付け，天井＝岩綿吸音板 天井高＝2,600

講堂：床＝置敷カーペット，一部マコレフローリング，壁＝マコレ練付け，及びクロス張り，天井＝クロス張り

ホール：床＝ビニールホモジニアスタイル

廊下：壁＝プラスター中塗下地塗装仕上げ

情報資料室：天井岩綿吸音板

事務室：床＝ビニールアスベストタイル，壁＝プラスター中塗下地塗装仕上げ，天井＝軟質石綿板

第1・第2アトリエ：床＝ビニールアスベストタイル，壁＝コンクリート打放し下地補修の上塗装仕上げ，天井＝軟質石綿板

研修室：床＝ビニールアスベストタイル，壁＝クロス張り，天井＝岩綿吸音板

和室：床＝玄晶石水磨き，タタミ，檜家甲板，壁＝京じゅうらく塗，天井：杉氈ベニヤ目透シ，竿縁天井

【昇降機設備】

荷物用エレベーター（三菱エレベーター）：制御方式＝交流2段速度歯車式，セレクトィブコレクティブ(DWA)F操作方式，規模：容量3,000kg，カゴ内法＝3,000×3,000×3,000，速度＝30m/min，戸閉型式＝電動式2板戸上下開き

【空調設備】

空調方式：展示棟＝CAV（定風量型）＋VAV（可変風量型）方式；県民アトリエ＝各室ハンドリング方式，管理棟＝VAV方式，保管庫＝露点再熱制御方式

熱源：空気熱源スクリュウ熱回収ヒートポンプ方式

【衛生設備】

給水：ポンプ圧送方式，引込み管径80mm

排水：汚水・雑排水合流方式系統（管径300），雨水系統（管径300）別，公設本管へ放流

【電気設備】

受電方式：交流 3相3線式6,000V 50Hz，電灯幹線＝交流 単相3線式200V/100V 50Hz，分岐支流

＝单相2線式200V/100V 50Hz, 分力幹線および
分岐支線＝交流 3相3線式200V 50Hz, 電話交
換方式：40回線クロスバー完全共通制御分散中継方
式, 契約容量：630Kw

【防災設備】

排煙方式：自然排煙, 機械排煙（第1,2,7展示室）
消火方式：屋外・屋内消火栓, 不燃性ガス消火設備
ハロゲン1301（電気室, 機械室, 収蔵庫1.2）
自家発電：ディーゼル機関直結交流発電機, 定格出
力100kVA

【その他の設備】

防犯設備：ITVカメラ設備, 防犯警報装置, 調光放
送設備, 火災報知設備

工期及建設経費

第1期工事（展示棟）

工期 昭和47年9月20日～昭和49年3月31日

工事費 775,967千円

本体工事 425,230千円

電気設備工事 79,663千円

空調設備工事 166,493千円

給排水衛生設備工事 28,995千円

外構工事 67,705千円

ガス工事 7,881千円

第2期工事（管理棟）

工期 昭和50年3月1日～昭和51年2月20日

工事費 453,800千円

本体工事 305,500千円

電気設備工事 30,000千円

空調設備工事 79,000千円

給排水衛生設備工事 19,514千円

外構工事 17,786千円

第3期工事（県民アトリエ）

工期 昭和54年3月22日～昭和55年2月29日

工事費 368,807千円

本体工事 247,565千円

基礎杭打工事 16,542千円

空調設備工事 56,200千円

電気設備工事 35,000千円

給排水衛生設備工事 13,500千円



展 示 棟

玄関ホール	102.40	m ²	第三休憩室	23.04	m ²
クローク	91.80	m ²	便 所 A	30.24	m ²
倉 庫 A	2.70	m ²	" B	23.76	m ²
" B	2.70	m ²	身障者用便所	7.92	m ²
第一展示室	437.76	m ²	コントロール室	20.16	m ²
" 二 "	400.32	m ²	フィルター室	28.92	m ²
" 三 "	469.08	m ²	工 作 室	31.00	m ²
" 四 "	403.20	m ²	発 電 機 室	25.00	m ²
" 五 "	824.19	m ²	電 気 室	123.20	m ²
" 六 "	330.58	m ²	ポン プ 室	76.80	m ²
" 七 "	566.56	m ²	機 械 室	305.20	m ²
食 堂	119.52	m ²	高架水槽室	11.46	m ²
厨 房	36.00	m ²	E. V機械室	27.28	m ²
従業員控室等	17.28	m ²	E. V廻 り	54.56	m ²
食堂ホール	61.20	m ²	ダクトスペース	35.68	m ²
ロ ビ ー	335.52	m ²	廊 下 等	123.48	m ²
第一休憩室	23.04	m ²			
" 二 "	23.04	m ²	合 計	5,194.59	m ²

管 理 棟

(1階)

第2会議室	22.62	m ²	庶務課室	112.34	m ²
更衣室	14.83	m ²	会 議 室	43.84	m ²
医 務 室	21.18	m ²	学 芸 課 室	195.32	m ²
文 書 庫	22.02	m ²	学芸相談室	23.91	m ²
警 備 員 室	43.59	m ²	研究工作室	216.49	m ²
第一会議室	20.15	m ²	写真スタジオ	54.30	m ²
倉 庫	7.19	m ²	器 材 室	6.74	m ²
湯 沸 室	5.19	m ²	暗 室	12.19	m ²
便 所	24.54	m ²	第一収蔵庫	184.40	m ²
宿 直 室	34.20	m ²	" 二 "	42.81	m ²
物 置	9.92	m ²	E. V前室	16.39	m ²
用 務 員 室	31.83	m ²	便 所	21.50	m ²
審査室・資料準備室・荷解室	520.68	m ²	湯 沸 室 A	3.24	m ²
消 毒 室	31.79	m ²	" B	6.87	m ²
資 料 倉 庫	124.25	m ²	廊 下 等	60.94	m ²
荷解梱包保管室	52.67	m ²	ダクトスペースその他	3.56	m ²
荷扱人控室	21.94	m ²			
機 械 室	51.74	m ²	小 計	1,090.75	m ²
廊 下 等	123.52	m ²	合 計	2,274.60	m ²
小 計	1,183.85	m ²			

(2階)

館 長 室	33.27	m ²
副館長室	23.42	m ²
第一応接室	14.67	m ²
第二応接室	14.55	m ²

県民アトリエ

1 F 機械室	25.92	m ²
講 堂 倉 庫	8.64	m ²
講 堂	259.24	m ²
コントロール室	30.33	m ²
ホール側便所	29.97	m ²
情報資料室	172.77	m ²
同 上 倉 庫	4.70	m ²
事 務 室	22.76	m ²
研 修 室	74.70	m ²
同 上 倉 庫	4.23	m ²
第1アトリエ	155.70	m ²

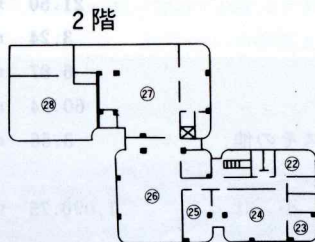
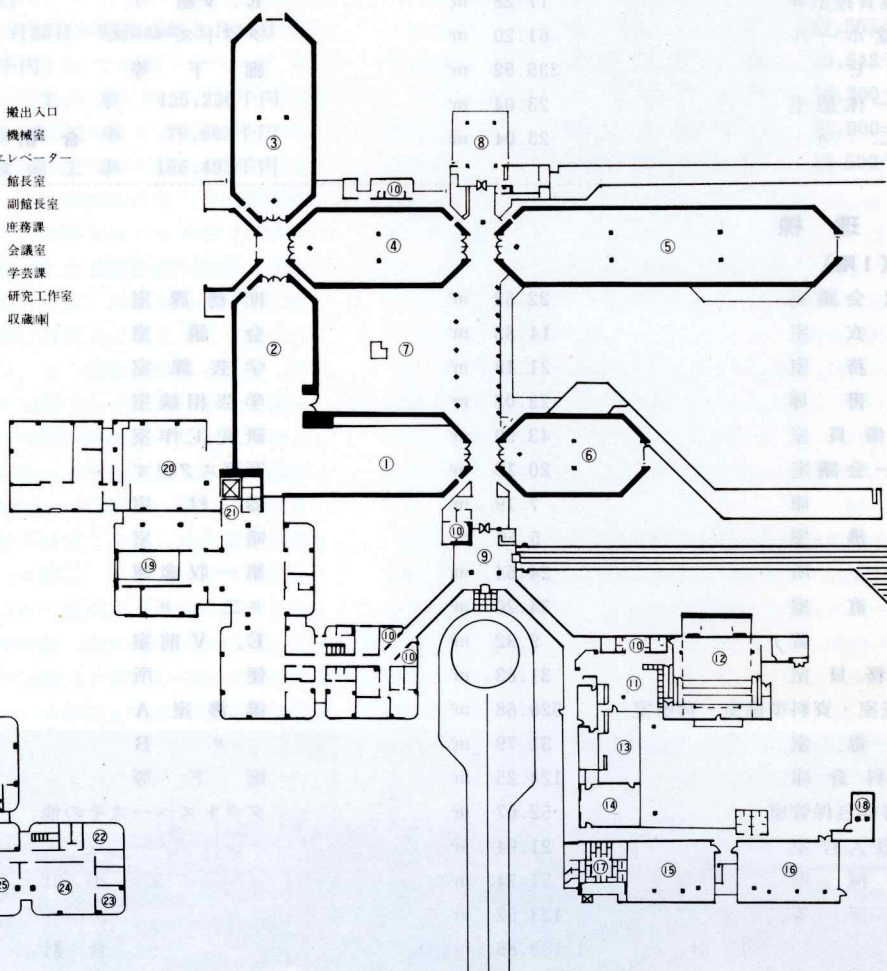
第2アトリエ	184.31	m ²
第3アトリエ	95.47	m ²
アトリエ側便所	20.77	m ²
荷 解 室	25.65	m ²
窯 場	27.17	m ²
同 上 倉 庫	6.66	m ²
ホールその他	352.67	m ²

小 計 1501.66 m²

合 計 8,970.85 m²

施設

- ①～⑦ 展示室
- ⑧ 食 堂
- ⑨ 玄関ホール
- ⑩ トイレ
- ⑪ ホール
- ⑫ 講 堂
- ⑬ 情報資料室
- ⑭ 研修室
- ⑮～⑰ 実技室
- ⑱ 産 場
- ⑲ 搬出入口
- ⑳ 機械室
- ㉑ エレベーター
- ㉒ 館長室
- ㉓ 副館長室
- ㉔ 庶務課
- ㉕ 会議室
- ㉖ 学芸課
- ㉗ 研究工作室
- ㉘ 収蔵庫



事業報告

1 “みる”事業について

特別展として、年度当初に「芹沢銈介展」を行ない、重要無形文化財「型絵染」の保持者芹沢銈介の芸術を展覧した。9月には、「房総を訪れた巨匠たち」展を開催し、作家と房総とのかわりについて考えてみた。また、2月には、「水彩画の再発見」展として、明治から昭和に至るまでの我が国の水彩画の変遷を理解し、その魅力を再発見した。

企画展では、国立公園協会所蔵作品による「日本の風土」展、日加国交50周年記念としてカナダ大使館の協力による「カナダ風景画展」、房総の美術家シリーズの第8回目として郷土の夭折の画家「板倉鼎」展をそれぞれ開催した。

常設展は、年間を2期にわけ、房総ゆかりの作家に焦点をあて行った。また、千葉県移動美術館は、成田市と銚子市で開設し、地域の人々に鑑賞の機会を供した。

2 “かたる・つくる”事業について

“かたる”事業として、講演会を3回、美術を語る会を6回開催した。また、夏季大学は、日本近代洋画史をテーマに行った。

一方、“つくる”事業としては、「デッサン入門講座」「てん刻入門講座」「七宝焼講習会」を開講した。特に、昭和53年度末より建設工事が進められていた県民アトリエが竣工し、昭和55年度からは、普及事業の拠点として期待されるところが大きい。

3 資料収集について

美術資料は、収集方針に基いて、本年度も数多くの作品が収蔵されたが、さらに美術品取得基金条例が定められ、今後の集収活動に大きな力を発揮するものと期待される。

常 設 展

常設 収蔵作品展 一房総ゆかりの美術家50人—

会 期 昭和54年5月24日～9月9日

展示点数 53点

入場者数 28,044人

本年度の常設展では、新収蔵作品をはじめ今日まで展示する機会がなかった作品などを広く公開した。特にこのたびは、本館で積極的に調査・研究をすすめ、作品の収集を図っている「房総ゆかりの美術家」に焦点をあてた。すでにこれまで開催した常設展でも、各テーマの中で、これら美術家を取り上げてきているが、今回、さらに多数の房総にゆかり深い美術家の紹介と顕彰に主眼を置き、収蔵作家の中から日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画にわたる50名の美術家の作品を一堂に展観した。

出 品 目 録

作 家 名	作 品 名	作 家 名	作 品 名
＜日本画＞			
酒 井 亜 人	太 池	深 沢 幸 雄	伝 掌
若 木 山	の	深 沢 幸 雄	の 中 の
渡 辺 学	夜	富 田 文 雄	75 一 20
岩 崎 巴 人	波 濤 岩 礁	"	接 合 77 一 25
加 倉 井 和 夫	穀	＜書＞	
東 山 魁 夷	門	浅 見 喜 舟	崔 子 玉 座 右 銘
富 取 風 堂	群	小 暮 青 風	万 葉 集 東 歌
田 岡 春 徑	幽	大 石 隆 子	侍 故 郷 之 山 河
鈴 木 月 潭	茂 残 雪	種 谷 扇 舟	視 思 の 明 詩
島 多 訥 郎	秋	金 子 聰 松 龍	良 寛
立 石 春 美	狗	＜彫 塑＞	
秋 葉 長 生	西 の 京	荒 居 德 亮	女 性 マ ス ク
関 主 税	滝	大 川 逞 一	聖 観 音
松 尾 敏 男	原	藤 野 天 光	希 倚 大
高 畑 郁 子	メ ス テ ィ ー ソ の 女 達	大 須 賀 力	る 女 葉
＜洋 画＞		長 谷 川 昂 衛	呻
浅 井 忠	農 八	＜工 芸＞	
都 島 英 喜	瀬 の 秋	香 取 秀 真	靈 獸 文 大 花 瓶
原 勝 郎	モ ン マ ル ト ル	津 田 信 夫	鳳 翔 薰 罏
石 橋 武 治	砂 和 田 海 岸	宮 之 原 謙	象 嵌 磁 鉢
林 倭 衛 雄	岩 重 子 像	土 肥 刀 泉	釉 彩 両 耳 花 瓶
椿 貞 雄	八	信 田 洋 平	蠟 銀 ひ さ 古 瓶
円 城 寺 昇 一	岩 花 ノ 湖	藤 田 喬 賢	飾 簀 朱 苑 森 寺
鳩 川 誠 一	麗 芦 並 木 道	青 木 滋 芳	苑 森 寺
笹 岡 了 一	冬 の サ の 斜 塔		
桜 田 精 彦	夢 の の 詩		
時 田 幸 彦			
久 保 木 彦			
＜版 画＞			
浜 口 陽 三	ボ プ ラ		
"	さくらんぼと青い鉢		

印刷物 目録 B 5 2折 7,000枚

常設 収蔵作品展 —収蔵作家50人展—

会 期 昭和54年12月 7 日～昭和55年 2 月15日

展示点数 62点

入場者数 22,011人

本年度の常設展では、新収蔵作品をはじめ今日まで展示する機会がなかった作品などを広く公開することにした。その観点にたち、第1期では、特に房総ゆかりの美術家に焦点をあて、日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画の6分野にわたる作品の展観を行なった。

今回の第2期においては、第1期でとりあげた美術家も一部含め、さらに広く房総ゆかりの美術家を中心に紹介と顕彰を図るため、50名の美術家の作品62点を一堂に展観し、多くの方々に鑑賞していただく機会とした。

出 品 目 録

作家名			作品名			作家名			作品名			作家名		
〈洋画〉						渡辺学			川口			口野		
浅井忠	老母像	像	松尾敏男	原野	野	松尾敏男	原野	野	松尾敏男	原野	野	松尾敏男	原野	野
都鳥英喜	婦人像	像	中村象閣	古斎藤茂吉	歌	中村象閣	古斎藤茂吉	歌	中村象閣	古斎藤茂吉	歌	中村象閣	古斎藤茂吉	歌
石井柏亭彦雄	信州風景	風景	千代倉桜舟鶴石	万林鳥相忘不	人	千代倉桜舟鶴石	万林鳥相忘不	人	千代倉桜舟鶴石	万林鳥相忘不	人	千代倉桜舟鶴石	万林鳥相忘不	人
霜鳥部重太郎	緑のウェー	一	石井雙石	彫塑		石井雙石	彫塑		石井雙石	彫塑		石井雙石	彫塑	
黒田勝郎	浴後	後	荒居徳亮	女聖希倚釈大阿富迦優羅舍目阿須菩呻	ク音望女迦葉律那廷離羅弗連難提	荒居徳亮	女聖希倚釈大阿富迦優羅舍目阿須菩呻	ク音望女迦葉律那廷離羅弗連難提	荒居徳亮	女聖希倚釈大阿富迦優羅舍目阿須菩呻	ク音望女迦葉律那廷離羅弗連難提	荒居徳亮	女聖希倚釈大阿富迦優羅舍目阿須菩呻	ク音望女迦葉律那廷離羅弗連難提
原勝郎	コヒール	風景	大川逞一	性マ	ス	大川逞一	性マ	ス	大川逞一	性マ	ス	大川逞一	性マ	ス
石橋武治	白鷺のいる	風景	藤野天賀川	観る		藤野天賀川	観る		藤野天賀川	観る		藤野天賀川	観る	
大久保作次郎	丘上田海	鐘楼	大須賀力昂	迦那楼旃婆睺利健		大須賀力昂	迦那楼旃婆睺利健		大須賀力昂	迦那楼旃婆睺利健		大須賀力昂	迦那楼旃婆睺利健	
林倭衛雄	水彩画家(渡辺義一君像)	岬												
椿貞雄	冬の犬吠	岬												
三田精輝	絵馬に	よ												
篠崎輝夫	廃	船												
原三郎														
〈版画〉														
鰐嘔	ANGELS	使	神野義衛	天		神野義衛	天		神野義衛	天		神野義衛	天	
永瀬義郎	もの想う天	使	郡司和男	笑獅子香	妒	郡司和男	笑獅子香	妒	郡司和男	笑獅子香	妒	郡司和男	笑獅子香	妒
浜口陽三	ぎくろく		香津田信夫	象嵌耳花	瓶	香津田信夫	象嵌耳花	瓶	香津田信夫	象嵌耳花	瓶	香津田信夫	象嵌耳花	瓶
瑛九	みみづく		土肥刀泉	釉彩両耳	湾光雀	土肥刀泉	釉彩両耳	湾光雀	土肥刀泉	釉彩両耳	湾光雀	土肥刀泉	釉彩両耳	湾光雀
池田満寿夫	スフィンクス		山本正平	瑞飾宮朱	雀	山本正平	瑞飾宮朱	雀	山本正平	瑞飾宮朱	雀	山本正平	瑞飾宮朱	雀
深沢幸雄	白い光の塔(グワテマラ)		藤田喬平	紋金彩花	瓶	藤田喬平	紋金彩花	瓶	藤田喬平	紋金彩花	瓶	藤田喬平	紋金彩花	瓶
〈日本画〉														
東山魁夷	門	深	香取秀真	笑獅子香	妒	香取秀真	笑獅子香	妒	香取秀真	笑獅子香	妒	香取秀真	笑獅子香	妒
"	秋	深	津田信夫	象嵌耳花	瓶	津田信夫	象嵌耳花	瓶	津田信夫	象嵌耳花	瓶	津田信夫	象嵌耳花	瓶
吉岡堅二	瀟馬幽	魚趣	宮之原謙	瑞飾宮朱	雀	宮之原謙	瑞飾宮朱	雀	宮之原謙	瑞飾宮朱	雀	宮之原謙	瑞飾宮朱	雀
"	群秋	魚趣	土肥刀泉	紋金彩花	瓶	土肥刀泉	紋金彩花	瓶	土肥刀泉	紋金彩花	瓶	土肥刀泉	紋金彩花	瓶
田岡春径	西の	京	信田洋年			信田洋年			信田洋年			信田洋年		
富取多訥郎	西の	京	山本正平			山本正平			山本正平			山本正平		
島多石春長	西の	京	藤田喬平			藤田喬平			藤田喬平			藤田喬平		
立石春美	西の	京												
秋葉長生	西の	京												

印刷物 目録 B 5 2折 5,000 枚

特 別 展

—その創造のすべて—

芹 沢 銑 介 展

会 期 昭和54年4月19日～5月20日

展示点数 152点

入場者数 10,042人

芹沢銑介氏は、型絵染の大家として著名であるが、氏の創造はそれだけにとどまらず、装飾の領域の他のさまざまな分野にまで、幅広く及んでいる。

芹沢氏の作品は、着物、のれん、屏風、挿絵、ガラス絵、板絵、陶器、本の装幀など、どれをとっても強い個性と豊かな創造力にあふれており、その華麗さと静けさとの織りなす絶妙の調和は、私達を魅了しつづけている。

本展では、これらの作品と、その背景となる型紙や制作工程等の資料をまじえ、芹沢芸術の全貌を一堂に展覧し紹介した。



出 品 目 録

●着物

小山紙漉村文地白縮緬着物
丸紋地白縮緬着物
笥文黄茶地麻部屋着
いろは文字文錆朱地御召着物
苗代川文水色地縮緬着物
漁具文地白藍型麻部屋着
布文地白藍型芭蕉布着物
沖繩笠団扇文黄地芭蕉布部屋着
木目文地白縮着物
襷垂文地白芭蕉布着物
鏡文縮部屋着
鯛泳ぐ文臙脂地縮緬着物
芭蕉文地白藍型芭蕉布着物
立本文黒地縮着物
斜め格子金彩縮着物
色入子菱摺箔地白縮紵着物
文字文地白麻部屋着
縄文藍型芭蕉布着物
破れ格子文地白縮部屋着
型染筆彩縮着物

●着尺

竹梅文黄地麻着尺裂
沖繩笠団扇文藍地木綿着尺
津村小庵文縮緬着尺

●帯

柳文金茶地紬帯
横段丸ならび文地白縮緬帯
亀甲文藍地木綿帯
山並文地白縮帯
赤い葉文地白縮緬帯
童子文藍地縮緬帯
李朝の函文縮緬帯
木立文黄茶地紬帯
雪持笹に松梅文藍地縮緬帯
苗代川文縮緬帯

●夜具地・夏掛

笹に牡丹唐草文おやり地夜具地
竹に小梅文藍地木綿夜具地
宝づくし文萌黄地紬夜具地
柳文地白芭蕉布夏掛
いろは文紺地木綿夜具地

●飾布・壁掛・カーテン

赤玉藍玉絞り染め地白木綿飾布
機道具文地白山繭飾布
短冊散らし文地白山繭飾布
杓子菜文藍地木綿壁掛
蔬果文藍地木綿壁掛
伊達けら図藍地紬壁掛
蓑図茶地紬壁掛

窯出し文藍地木綿間仕切
立涌幾何文焦茶地紬カーテン
松文黄色返し木綿カーテン

●のれん

打てや双手を文のれん
ようこそ文のれん
組紐文のれん
登り窯文のれん
水に鯉のれん
縄のれん文のれん
風の字のれん
この山みち文のれん
華の字のれん
染屋文のれん
牡丹文のれん
宝づくし文のれん
御龍図のれん
朝顔文のれん
妙の字のれん
薪文のれん
天の字のれん
一本松のれん
壺屋の窓のれん
ねじりん棒のれん
寿文のれん

あなたのし文のれん
女人俑のれん

●屏風

蔬果文四曲屏風
紙漉六曲屏風
丸紋伊呂波八曲屏風
文字入り四季文二曲屏風
いろは文六曲屏風
極楽から来た挿絵貼まぜ八曲屏風
晴雨二曲屏風
布文字春夏秋冬二曲屏風
李朝の器物二曲屏風
座辺の李朝二曲屏風
洲浜型四季文四曲屏風
和本散らし二曲屏風
沖繩なつかしい二曲屏風
四季曼荼羅二曲屏風
京の祭二曲屏風
いろは文二曲屏風
紺屋ぼめ二曲屏風

●染絵軸

静岡四季の内龍爪山の雪
静岡四季の内久能暇の桜
リーチ益子窯出し
沖繩女三人
沖繩絵図
那覇大市図
僧の図
紙雛

●染絵額

沖繩風物
壺屋窯出し

梵字愛染明王
伊作紙漉藍型
和紙讃
喜の字
如の字
真の字
信の字
机辺静物
微笑観音像
人の字
幾何文
木の字
和の字

●ガラス絵

搬不倒
東寺夜叉神像
沖繩老女
古洋書
古玩具群
ろうそく
椅子
床上の本
椅子と布
裸婦

アフリカ土産

宿の裏

●陶器

ゆず図赤絵香合
登窯図赤絵香合
柳文赤絵香合
柳文赤絵皿
唐草文赤絵鉢

赤絵中皿
赤絵小皿
赤絵湯呑
丸文赤絵箱

●板絵

みかん手
亀歩く
雲湧く山
絡文
壺天地
鳥
塔
鶯鳴く
僧
紙漉き
どんきほうて(1~3)
掌中の玉
柳
手(奉納)
手
布
下絵(額装)
横浜市港北公会堂緞帳

その他

●肉筆本 27点
●限定本 72点
●装幀本 166点
●型紙 20点
●私家版 23点



展覧会を見る芹沢銈介氏



講演会 4月21日「芹沢銈介の仕事」 金子量重氏
 美術を語る会 5月5日「『芹沢銈介展』を見て」 本館職員
 印刷物 図録 24.0cm×25.0cm 1,000部
 ポスター 73.0cm×51.5cm 1,500枚
 チラシ(兼・目録) B5 2折 15,000枚

房総を訪れた巨匠たち

会 期 昭和54年 9月14日～10月18日

展示点数 57点

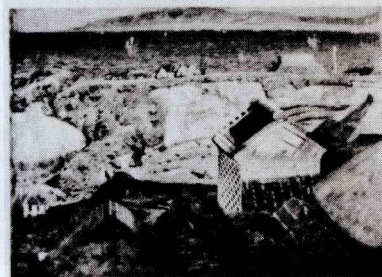
入場者数 6,807 人

明治以降、房総には数多くの作家が訪れ、風景画を描いている。それらの作家たちは、単に写生地のひとつとして過ぎ去っていった者がほとんどであるが、一部には、房総の温暖な気候と変化に富んだ景観にふれ、その作風に変化をもたらしたと思われる者もいる。彼らが受けた風土からの影響は、あまりにも微少であるかも知れない。しかし、それらの中には、美術史上に名を残す巨匠たちも認められ、軽視することのできない問題点を含んでいる。また、反面自らの作風等に変化をもたらせたというのではなく、房総の地に多大な業績を残した人々も認められる。

この展覧会では、房総を訪れた巨匠を取り上げ、それらの人々が房総という地からどのような影響を受けたか、あるいは房総の地にどのような業績を残したかを、各々の芸術の足跡をたどりながら問題提起し、同時に美術史の流れの中での房総を考えてみた。

房総を訪れた巨匠たち

藤島武二 小杉未醒 青木 繁 山本 鼎 坂本繁二 郎 金山平三 中村 彝
安井曾太郎 牧野虎雄 大久保作次郎 林 倭衛 荒島善三郎



昭和54年9月14日(金)～10月18日(木)

■企画：千葉県立美術館・千葉県立歴史民俗資料館
■協賛：千葉県立美術館・千葉県立歴史民俗資料館

千葉県立美術館

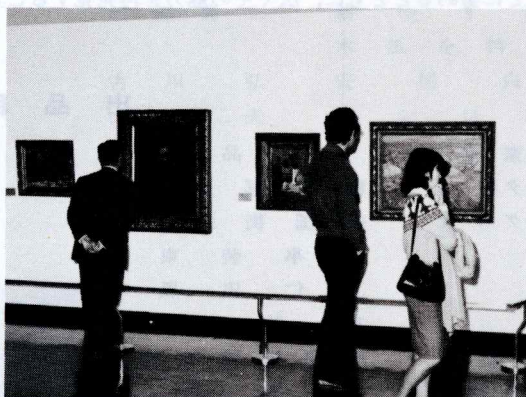
出 品 目 録

作家名	作品名
藤 島 武 二	大王岬に打寄せる怒濤 蘇州河激戦の跡 犬吠岬の燈台 上海黄浦江 婦人立像 アルハンブラの丘 潮来 帰牧図 海
青 木 繁	旧聖書物語挿絵⑧エステルとハマニ 風景
山 本 鼎	洪温泉にて 御宿風景 むすめ ブルターニュの夏 霧の湖畔 蟹と貝 新人参 牛 婦人立像
金 山 平 三	下諏訪のリンク 梨咲く 女の肖像 風雨の翌日

作家名	作品名
金 山 平 三	海岸 茂木(長崎)
中 村 彝	帽子をかぶる自画像 海辺の村 静物(花と果物) 鳥籠のある庭の一隅 栗田口風景 室 奥入瀬の溪流 鵜原風景 葡萄とペルシャ大皿 花苑 晩秋 房州風景 芥子畑 風景 裸婦 平和 大漁場 青塩物市 塩 氏 H パ 裸婦 無題、パイプをくわえた男
安 井 曾 太 郎	
牧 野 虎 雄	
大 久 保 作 次 郎	
林 倭 衛	

作家名	作品名
林 俊 衛	別 所 沼
	鶴 原 の 海
児 島 善 三 郎	黄 色 い 花 の 枕 の 裸 婦
	鏡

作家名	作品名	
児 島 善 三 郎	田 植 か え	じ 台
	春 遠	
	燈	



講 演 会 10月6日「房総を訪れた作家」窪島誠一郎氏
 美術を語る会 9月29日「原風景としての房総」高橋在久
 印刷物 図録 24.0cm×25.0cm 1,000部
 ポスター 73.0cm×51.5cm 2,000枚
 チラシ B 5 10,000枚

水彩画の再発見

会 期 昭和55年 2月19日～ 3月23日

展示点数 94点

入場者数 6,720人

わが国における水彩画は幕末に「絵入ロンドン・ニュース」特派員として横浜に来住したイギリスのチャールズ・ワーグマンによって伝えられ、それ以後、水彩画は急速に広まり、特に明治期後半になると、水彩画の専門雑誌「みずゑ」の創刊、あるいは日本水彩画会研究所の創立など、日本の水彩画を確立するための気運が高まり、水彩を専門とする画家も数多くあらわれた。

大正期に入り、各派の水彩画家の総合的な団体として日本水彩画会が創立されるなど水彩画運動の組織化が進み、また多くの研究会が発足した。そして昭和期に至り、新たな水彩画団体の誕生、水彩画技法の研究・開拓がなされ、その考え方、表現方法なども大きく変貌し今日に及んできている。

本展では、明治から昭和までのわが国の水彩画の歴史において、大きな足跡を残した水彩画家をはじめ、油彩と水彩両面にすぐれた技量を発揮した画家の水彩画にも焦点をあてて展示を行い、わが国の水彩画の変遷を理解することに努めるとともに、広くその魅力を再発見することにした。



出 品 目 録

作家名	作品名	作家名	作品名
フォンタネージ	建築写生法式	大下 藤次郎	溪
ワーグマン	中国街頭商人	真野 紀太郎	ば
	火事装束図	白 滝 幾之助	テームス河
	下 仁 田 風景		富士の見える風景
	本 牧 風景	三 宅 克 己	ニューヘヴンの雪
高 橋 由 一	根津権現境内図		羅馬コンスタンチン凱旋門
五 姓 田 義 松	山 手 洋 館		上 州 妙 義 山
	溪 流		相 模 湾
	家族の図	中 澤 弘 光	八 坂 の 塔
	田 園 風景	吉 田 博	池 の 鯉
	横浜高島町劇場		夜 の 書 斎
浅 井 忠	沢 入 駅		フロリダの家
	金 州 城 壁 上		五 月 の 田 舎
	春	加 藤 源 之 助	白 樺 の 森
	男 性 裸 像		八 坂 神 社
	農 家	森 田 恒 友	ループル風景
	京都高等工芸学校の庭	青 木 繁	黄 泉 比 良 坂
河 合 新 藏	放 牧	戸 張 孤 雁	挿 絵 1(書置)
丸 山 晚 霞	ヒマラヤと石楠花	石 井 柏 亭	ジプシーの娘
藤 島 武 二	春 の 小 川		プティ氏像
	黄 浦 江		晩 春 行 楽 図
大下 藤次郎	水 芭 蕉		舞 姫
	穂 高 の 麓	南 薫 造	赤い布をかぶった女
	高 原	長 谷 川 良 雄	風 景

作家名	作品名
長谷川良雄	春
萬鉄五郎	風景(友田の森)
	夕陽の砂丘
	高麗山の見える砂丘
	風景(友田の坂上から見下した)
小山周次	波太の磯(房州)
	湯の湖(奥日光)
	林檎と柿
栗原忠二	帆船
石井鶴三	縊死者
梅原龍三郎	下賀茂の森
	三十三間堂
赤城泰舒	雨、海を渡る
	野の梅
水野以文	犬吠風景
岸田劉生	村嬢於松立
小泉癸巳男	丸ビ
後藤工志	鈍
栗原信	潮
	筑
古賀春江	博覧会
村山槐多	庭園の少女
小山良修	徳利

作家名	作品名
中西利雄	トリエール・ジュ・セーヌ
	南仏風景
	婦人像(A)
	和装
	四人の女
	婦人像
不破章	千倉風景(平磯)
富田通雄	高原
	パリモンマルトルの丘より
荒谷直之助	支那服の少女
	若い裸婦たち
春日部たすく	裏磐梯初秋
小堀進	沖繩の海
	錦山麓
	逆光
	水郷
	大窪
無縁寺心澄	大尖煙
渡部菊二	耕す家
	木瓜を持つ女
古川弘	安房白浜
山本不二夫	エンジ



講演会 3月16日「美術と私」 水上勉氏
 美術を語る会 3月22日「水彩画の再発見」 陰里鐵郎氏
 印刷物 図録 26.0cm×18.2cm 700部
 ポスター 36.5cm×51.5cm 1,500枚
 チラシ(兼・目録) B5 20,000枚

企 画 展

—現代洋画界の巨匠78名による—

日 本 の 風 土

会 期 昭和54年 7月20日～ 8月19日

展示点数 78点

入場者数 6,911人

風景は、私たちのより身近なものとして、多くの画家の好きなモチーフとなって描かれてきた。そして、その風景画の中に、それぞれの生活体験から眺め感じた心象的な景観を表現し、独自の美の世界を築きあげている。

このたびの展覧会では、世界的にも屈指な自然美をもつ我が国の27か所の国立公園に焦点をしばり、現代を代表する78名の洋画家により描かれた個性豊かな名品を一堂に展覧した。

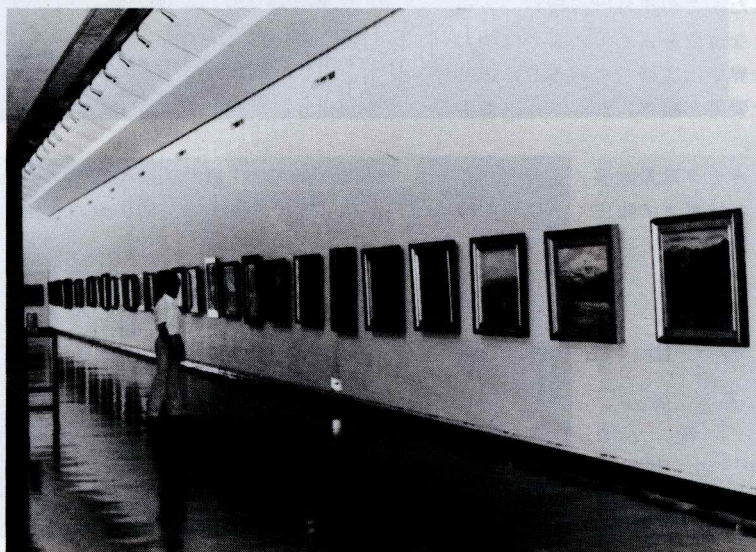
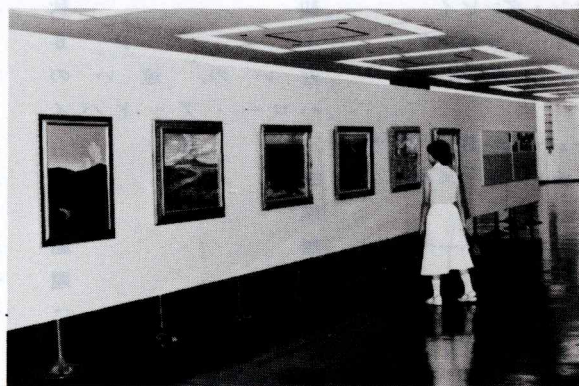
この中には、藤島武二の「瀬戸内海」のシリーズなどが制作される契機となったものも含まれ、近代日本美術史上における風景画の一面とその流れを知ることができるものであった。



出 品 目 録

正宗得三郎	若葉の山中湖	鍋井克之	新和歌ノ浦
有島生馬	霧島連山遠望	足立源一郎	愛別岳・比布岳
中沢弘光	上高地大正池	大久保作次郎	洞爺湖
山下新太郎	黒部峡谷鐘釣附近	寺内万治郎	荒川溪谷
和田三造	中部山岳	須田国太郎	春の来島海峡
柚木久太	八甲田の一角	栗原信	支笏湖畔
藤島武二	屋島よりの展望	中川紀元	梓英虞山湾
満谷国四郎	櫃石島の帰帆	川口軌外	英虞山の展望
山本鼎	秋の白馬岳	児島善三郎	霧島よりの展望
辻永	双湖台より見たるベンケ・パンケ	中山巍	奥秩父雲取山頂より
大野隆徳	奥入瀬溪流の秋	鈴木千久馬	琴平宮島湖
田辺至	秋の戦場が原	高畠達四郎	那浅清月久雲尾塩伊淡大
梅原龍三郎	朝の仙酔島湖	鈴木信太郎	和田須山峡山山夏沼流宮島山
上野山清貢	摩周湖	林武	
石川寅治	大観峰より阿蘇五岳を望む	中野和高三徳謙	
石井柏亭	雲仙春山	小山竹	
中村研一	大雪山	木下義助	
奥瀬英三	澗八丁	田崎広助	
鹿子木孟郎	吉野連山	野口弥太郎	
香田勝太	大富山	中村善策	
和田英作	三保富士	猪熊弦一郎	
斎藤与里	裏磐梯	小磯良平	
坂本繁二郎	暁明の根子岳	田村孝之助	
川島理一郎	芦ノ湖の夕照	海老原喜之助	
小糸源太郎	鳴門		

作家名	作品名	作家名	作品名
宮本三郎	姫	小野末	隠岐の朝
福沢一郎	奥秩父両神	鬼頭鍋三郎	柴山渴の白山
黒田重太郎	九十九	吉井淳二	屋久島永田岳
小林和作	由布	伊谷賢蔵	鎧の袖島
中村琢二	妙高	原精一	桜白岳
野間仁根子	摩耶山からの展望	鈴木良三	羅白岳
三岸節子	天八幡	服部正一郎	知鳥取砂丘
北川民次	中禅寺が	刑部又三郎	足摺三山
田辺三重吉	浄土御水	岡田誠三	夜叉神峠より見たる白峰
向井憲之雄	日白三瓶の海	芝田米寛	夕陽宇和海
田中忠男		中根右嗣	サロベツ原野より利尻・礼文を望む
新道繁		三栖本	小笠原父島から南島・母島を望む
			仲間川原始林



美術を語る会 7月28日「風景と作家」戸田健夫氏

印刷物 ポスター 59.5cm×42.3cm 1,500枚

目録(兼・チラシ) B5 10,000枚

カナダ風景画展

会 社 昭和54年 7月31日～ 8月12日

展示点数 43点

入場者数 2,770人

カナダの風景画の変遷をたどることは、カナダの歴史—社会と思想進展の跡—をみることであると言われている。カナダは、北西アラスカ、南はアメリカに接する面積約1千万平方キロメートルの広大な国で、画趣に富む風景を有している地としても知られています。17世紀前半からヨーロッパの人々が移住するようになり、その後、ナイアガラ滝などのカナダの風景を描いた作品が広くヨーロッパに紹介されるようになった。19世紀後半になると、ヨーロッパ芸術の単なる模倣から離れて、カナダ独自の芸術を生み出そうとする運動が盛んになり、その結果として、さらにカナダの風土をモチーフとした、さまざまな創作活動がなされた。この流れは、現在、カナダで創造されている芸術をみても大きな位置を占めているのは明らかである。現代カナダの芸術家は、世界中に流行している芸術運動の影響を受ける中で、カナダの特殊な要素を組み入れながら、彼等の芸術を独創性のあるものとしている。

今回、日加国交50周年記念として「カナダ風景画展」を開催した。この現代カナダの代表的芸術家27人の主として版画による風景画43点は、具象から抽象まで幅広く、技法も種々にわたり、現代のカナダ芸術の動向を知る恰好の展覧会であった。

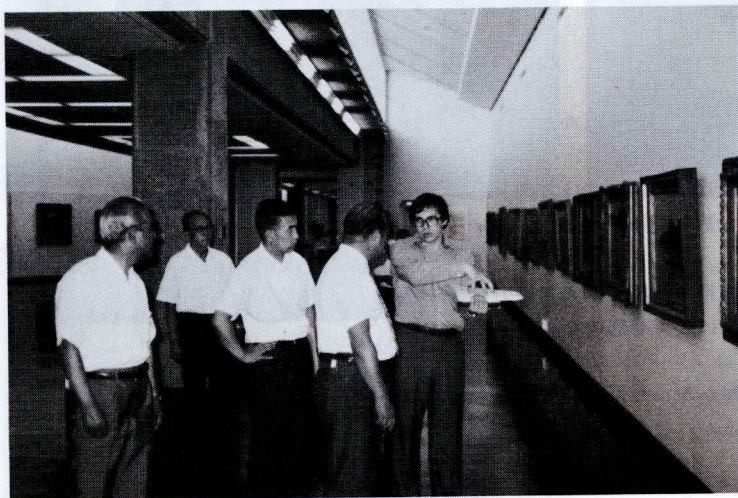


出 品 目 録

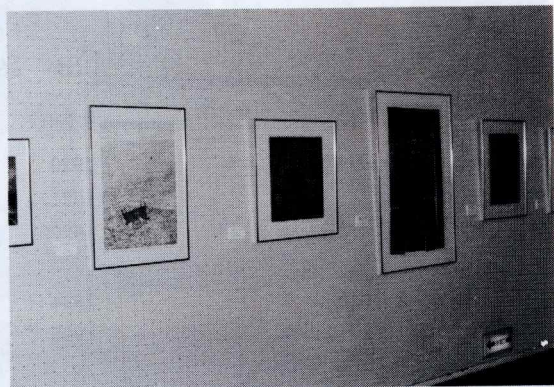
作家名	作品名	作家名	作品名
クリストファー・プラット	聖 金 曜 日	フレミング・ジョーゲンセン	北 の 海
	嵐 の 中 の 耕 作		海 岸
デビッド・ブラックウッド	島 の 葬 送	トニー・オンレイ	灰色の雲、白い丸太
レ・ルバン	ペ ギ ー の が け		バリガス島アーハウス湾の入江
ケン・ダンビイ	初 秋		緑 の 峡 谷
ジョー・マニング	イ メ ー ジ 6		山 の 中 の 湖
チャールズ・パッチャー	近 い の、 遠 い の	レスリー・リード	通 り 跡
	ハ ロ ー ・ グ ッ ド バ イ	トビー・スタインハウス	真 夏 の 夜 の 夢
シェームス・B・スペンサー	山	シャーレイ・ウェールズ	撤 去 の 橋
リチャード・エイツ	無 題	ルネ・デルアン	ツンドラの中の赤い小球
	無 題	ロバート・サブオア	タ ド サ ッ ク 村
ドナルド・ハーベイ	無 題	ジョン・K・エスラー	高速道路とさくらんぼ園
	無 題	ベニタ・E・サンダース	森 の 想 い 出
	夕 暮 れ と と も に	デニス・バートン	黄道帯オーロラシリーズ
クラウド・ブリーズ	カナダの男像柱：切株		黄道帯オーロラシリーズ
	カナダの男像柱：樺の木	ガーション・イスコウィツ	南部オンタリオの風景
ゴードン・スミス	アンブルサイドの岩壁		西 方 園 No. 13
キャサリン・ホスキソン	紫 色 の 山		東部オンタリオの風景
	二 つ の 山 の 反 映	ピーター・ドイチェ	上 流
フレミング・ジョーゲンセン	海 の 道	ジョイ・ウォーカー	春

作 品 名	作 品 名	
ルーシー	花 と 鳥	
ジェシー・オオナーク	春 の 氷 解	1

作 家 名	作 品 名	
ジェシー・オオナーク	春 の 氷 解	2



カナダ大使館より



印刷物 目録（兼・チラシ）B5 2折 3,000枚

房総の美術家シリーズ9

—美に生きた永遠の青春—

板倉鼎

会 期 昭和55年1月5日～2月3日

展示点数 39点

入場者数 6,920人

本展は《房総の美術家シリーズ》第9回として、本県ゆかりの夭折の画家「板倉鼎」をとりあげ紹介した。

板倉鼎は明治34年松戸市に生まれた。東京美術学校では、岡田三郎助に師事し、師譲りの温雅な写生画に力量を発揮、在学中から帝展等に入選を重ねている。

その後、夫人と共にフランスに留学、独自の画風を求めて努力を続け、大いに将来を嘱望されていたが、不幸にして急病のため28才の若さでバリの地に客死した。

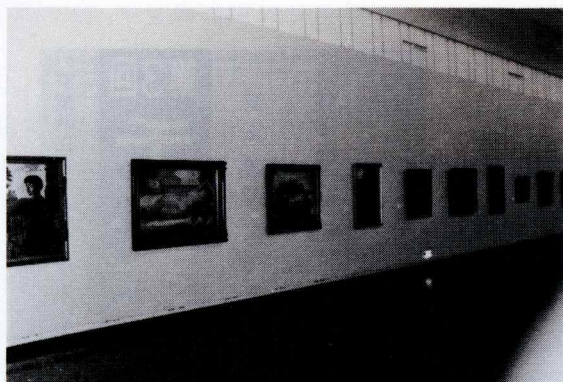
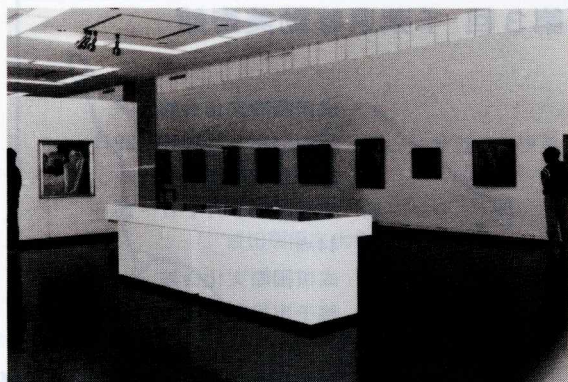
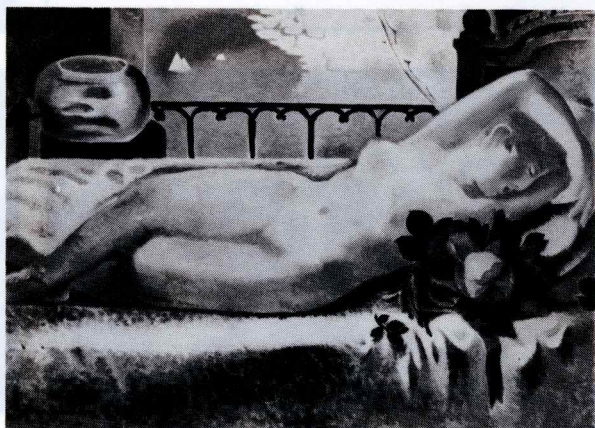
画家としての活動の期間があまりにも短かったため、板倉鼎の名前になじみのない人も多いかと思われるが、この展覧会を通して、鑑賞者が満足を得たものと確信する。



美に生きた永遠の青春
板倉鼎
昭和55年1月5日～2月3日 千葉県立美術館

出品目録

作 品 名	制作年	作 品 名	制作年
風景(秋更け行く)	1920	剣のあゝる静物	1927
静物	1921	ベネチア	1928
静物	1922	ベネチア風景	"
庭にて	"	古城	"
マンドリンを弾く少女	1924	風景	"
編物をする少女	1925	伊太利	"
沼風景	"	雲と少女	"
マンガを持てるカナカ人	1926	黒椅子にやる女	"
人物	"	赤衣の女	"
腰かける女	1927	金魚と雲	"
黒衣の女	"	金魚と花	"
立てる少女	"	籠のモネ	"
アネモネとマーガレット	"	アネモネ	"
アネモネ	"	黄赤	"
紫陽花	"	赤	"
野菜	"	画面の家	1929
金魚と烏貝	"	裸婦	"
ダリヤとグラジオラス	"	自画像	1921
籠と果実	"	子供	"
夏の野菜	"		



美術を語る会 1月19日「板倉鼎を語る」 板倉弘子氏

印刷物 ポスター 59.5cm×42.3cm 1,300枚
チラシ（兼・目録）B5 2折 7,000枚

第3回 千葉県移動美術館

成田国際文化会館
会 期 昭和54年 8月16日～29日
銚子市役所市民ホール
会 期 昭和54年 9月 1日～16日
展示点数 44点
入場者数 成田国際文化会館 1,714人
銚子市役所市民ホール 4,118人

千葉県立美術館は、昭和49年10月に開館して以来、郷土にかかわりの深い作品を中心に徐々に収集の輪を広げている。これらの作品は、県立美術館の常設展において、特別展等の期間を除いて順次公開されているが、更により広範な地域の人々に美術作品鑑賞の機会を提供するため、企画されたのが千葉県移動美術館である。

この展覧会を通し千葉県立美術館の活動の一端を理解いただき、美術をより身近かなものとしてとらえていただければと企画した。

千葉県立美術館収蔵作品による

洋画・日本画
版画・工芸・書画

第3回 千葉県移動美術館

成田国際文化会館

昭和54年 8月16日～29日

銚子市役所市民ホール

昭和54年 9月1日～16日

主催 千葉県立美術館
主 催 成田市、銚子市、成田国際文化会館

出 品 目 録

作家名	作品名	作家名	作品名
<洋画>		<版画>	
浅井 忠	婦 人 像	若 木 山	早 春
都 鳥 英 喜	洛 北 の 早 春	杉 原 元 人	海 花
	巴里郊外サンクール	渡 辺 学	川 口
霜 鳥 之 彦	緑 の ス ウ ェ ー タ ー	篠 崎 之 男	瀧
	ロ シ ア の 女	<版画>	
黒田重太郎	女 と 小 犬	浜 口 陽 三	赤い鉢と黒いサクランボ
原 勝 郎	コ ー ヒ ー ひ き		く る み
	京 橋	深 沢 幸 雄	白い光の塔(グワテマラ)
石 橋 武 治	早 春		飛 神
	裸 婦	池 田 満 寿 夫	シンデレラの広告
大久保作次郎	丘 上 の 鐘 楼		ウエルカム B
菅谷元三郎	沼 風 景	<工芸>	
椿 貞 雄	黒 壺 に 椿 一 輪	香 取 秀 真	笑 獅 子 香 炉
三 田 康	冬 の 犬 吠 岬		鳳 凰 文 様 花 瓶
鳩 川 誠 一	ラ イ ラ ッ ク と 蝶	津 田 信 夫	北 辺 夜 猫 子
無 縁 寺 心 澄	銚子大新楼上にて		一 點 玲 瓏
山 本 不 二 夫	ハイデルベルグ風景	信 田 洋	伸 び ゆ く 湾
篠 崎 輝 夫	絵 馬 に よ る	山 本 正 年	瑞 光
鏝	B I R D S	鈴 木 治 平	条 紋 金 彩 花 瓶
	I N S E C T S	土 肥 満	向 い あ う 単 体
原 三 郎	廃 船	<書>	
<日本画>		浅 見 喜 舟	檣
田 岡 春 徑	竹 林	千 代 倉 桜 舟	斎 藤 茂 吉 歌
吉 岡 堅 二	濤	中 村 象 閣	古 泉 千 櫨 の 和 歌



成田会場

印刷物 ポスター 59.5cm×42.3cm 1,000枚
目録(兼・チラシ) B5 2折 12,000枚

千葉県芸術祭

第31回 千葉県美術展覧会

会 期 昭和54年10月27日～11月18日

展示点数 1,562点

主 催 千葉県美術会・千葉県教育委員会・千葉県

本県の美術家の作品を広く紹介するとともに、県民の美意識を高め、郷土美術文化の振興と情操の純化に資するために開催するもので、日本画・洋画・彫塑・工芸・書道の各分野を展示した。

県展

31回

54年10月27日→11月18日
午前9時より午後4時30分まで
・月曜休館
会場・千葉県立美術館
主催・千葉県美術会
千葉県教育委員会
千葉県
千葉市教育委員会
部門・日本画・洋画・彫塑
工芸・書道

出品点数

	会 員 出 品	公 募 出 品	入 選 点 数	展 示 点 数	新 入 選
日 本 画	72 (74)	176 (179)	139 (151)	211 (228)	54
洋 画	176 (167)	601 (592)	293 (319)	469 (488)	98
彫 塑	50 (51)	33 (29)	28 (25)	78 (79)	21
工 芸	46 (37)	121 (116)	99 (97)	145 (135)	47
書 道	159 (163)	757 (736)	500 (486)	659 (652)	124
計	503 (492)	1688 (1652)	1059 (1078)	1562 (1582)	344

() 内は30回展

解説会 10月27日 日本画 時 田 直 善 氏
11月3日 洋 画 山 谷 鎧 一 氏
11月4日 彫 塑 原 武 典 氏
11月10日 工 芸 三 橋 英 作 氏
11月17日 書 飯 高 和 子 氏

印刷物 目録 25.8cm×18.4cm 3,000部 ポスター 36.4cm×51.2cm 1,000枚

美術・工芸・書道展

主 催 千葉県高等学校芸術祭実行委員会
千葉県教育委員会

'79
千葉県高等学校総合芸術祭

○連合音楽会
千葉県文化会館大ホール
11月24日土
PM3:30・PM8:00
11月25日日
AM10:00・PM8:00

○美術工芸書道作品展
千葉県立美術館
11月22日土・12月2日金
AM8:00・PM4:30(休館日)

○演劇中央発表会
千葉県教育会館
11月24日土・11月25日日
AM8:00・PM5:00

部 門	書 道	美術・工芸	計
生 徒	78校	61校	139校
教 員	73校	22校	95校
計	151校	83校	234校

昭和54年度千葉県芸術祭

主 催 千葉県写真家協会
千葉県教育委員会

[illegible]

応募者数	応募点数	入選者数	入選点数	展示点数	会 員 数
175人	319点	96人	102点	125点	18人

団 体 展

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
全 日 本 書 の 友 会 一般部・学生部書道展	千葉県下の書道文化の普及向上をめざし、 加えて全国各地より参加し、その力量を競い 合い千葉県書道文化向上発展に貢献すること を目的とした。	54.4.10 ～4.15	1,269
第 2 回 千 葉 新 芸 術 展	新芸術至上主義による造形美術の探究・研 賛をもって真の芸術を開拓樹立し、画壇にお ける最もオリジナルなギルドとして名誉ある 足跡を記録することを目的とした。	54.4.17 ～4.22	47
千 葉 工 芸 展	千葉県及び一円の工芸家の作品発表の場と して、また新人育成の場ともし、あわせて県 美術文化の向上を目的とした。	54.4.24 ～5.6	54
千 葉 新 協 展	県内に在住する会員の研究発表を目的とす るものであり、油彩・水彩・版画の作品を展 覧した。	54.5.2 ～5.6	114
第 5 回 歩 会 彫 刻 展	県内の彫刻家が集まり、所属団体や流派に とらわれない自由な勉強と県下に作品を発表 することを目的とした。	54.5.2 ～5.13	67
等 迦 会 千 葉 支 部 展	会員相互の自由な芸術的立場を尊重し、助 け合いながら共通の発表の場を維持し、各自 の作家的完成を目標とした。	54.5.8 ～5.13	48
二 科 千 葉 支 部 展	広く県下の一般・ジュニアより作品を公募 し県美術文化の振興発展を願い、二科会の趣 旨にそって開催した。	54.5.15 ～5.20	992
千 葉 市 ア マ チ ュ ア 美 術 ク ラ ブ 展	千葉市民又は千葉市内勤務者のアマチュア 美術家及び美術愛好者の親睦を深め会員相互 の技術の向上を目的とした。	54.5.15 ～5.20	159
墨 の 県 展	東京の隣接都市としての千葉の文化発展に 力をつくし、併せて県民に伝統文化の啓蒙を 促した。	54.5.22 ～5.27	288
表 美 展	県内の表具・経師・内装の技術の向上を図 り、地域文化産業の発展に期することを目的 に作品を公開し、日本古来の伝統技術の向上 及び普及につとめた。	54.5.29 ～6.3	120

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
千葉県書道協会展	書道文化の振興と会員相互の研修・親睦をはかることを目的とした。	54.6.5 ～6.10	292
一陽会千葉支部展	会員の近作を発表し、今後の発展と向上を目指すとともに美術の普及をはかった。	54.6.5 ～6.10	40
千葉県写真家協会展	伝統を守る人々にレンズを向け、写真を通じて文化向上発展に資することを目的とした。	54.6.12 ～6.17	27
現代書道50人展 現代書壇代表名作展 千葉書壇秀抜展 千葉書壇新進展	現代書道界における佳作と千葉県内から秀抜された作品を一堂に展示し、書道のより一層の興隆と普及をはかった。	54.6.19 ～7.1	300
千葉市水墨画 同好会連合会展	会員の作品を広く一般に紹介するとともに水墨画の普及・啓蒙につとめた。	54.7.3 ～7.8	528
千葉美術シンポジウム & 青 枢 展	混迷する現代社会にあって常に新しい世紀の幕開けを目指し、生命の尊厳に根ざした新たな芸術の探究・創造に努めた。	54.7.10 ～7.15	260
千葉盲学校陶芸展	授業で制作した作品を展示し、障害者に対する社会の理解を求めるとともに、児童・生徒に対する教育効果を高めるために開催した。	54.7.17 ～7.22	125
'79 精 鋭 展	女流作家を主体とする絵画展であり、既成のアカデミックな美学にあきたりない新進気鋭の作品発表を主とした。	54.7.17 ～7.29	41
現代美術《水か魚か展》	発表する作品の作者名を全て消去し、作者の自己解放をはかり、作品の純粹性を引き出し、また原点的作品の発表のあり方が可能かどうかを確かめる作業とした。	54.8.14 ～8.19	25
子供と教師の作品展	児童作品を発表し、造形美術教育の振興をはかるとともに、教師の造形作品についての研修・研究の場とした。	54.8.21 ～8.26	660

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
第 9 回 いてふ会彫刻展	図工・美術科教師としての資質を高める為の研究の一端を作品発表を通して、会員の研修と同時に県下の数多くの保護者・児童・生徒をして美術に親しませる機会とした。	55.8.21 ～9.2	45
第 7 回 千 葉 市 教 職 員 美 術 展	千葉市在住・在勤の教職員の創作意欲を活発にし、図工・美術教育の指導力の向上をはかった。	54.8.28 ～9.2	130
静雅書道会千葉地区展	就学前児童より中学生までの生徒による一年一度の日頃の成果を発表し、父兄及び一般からの声を聞き、今後のかてとした。	54.8.28 ～9.2	230
第 5 回 千葉県児童美術展	児童の絵画作品を通して相互交流を図り、児童の情操と美的感性の向上に資した。	54.9.4 ～9.9	1,188
第 8 回 写 真 千 葉 県 展	県内全写真人を対象に写真文化の推進を目的に一般公募し、その作品を通してゆたかな心とゆとりある社会を築く一助とした。	54.9.4 ～9.16	212
第 19 回 白 扇 書 道 会 展 全 国 学 生 書 道 展	会員や公募作品の発表とともに、中国の原拓を展示し、県民の鑑賞力を高め、また、会員の研究心を高めることを目的とした。	54.9.11 ～9.16	2,330
千 葉 79 展	実験的な制作活動を行う美術家の交流をはかり、相互啓発をするとともに、県内美術文化の向上をはかった。	54.9.18 ～9.24	71
千 葉 県 新 構 造 支 部 展	絵画・工芸・写真部門からなり、これらの展示を通し地方作家の発掘を願い、かつ県民の教養向上に努めた。	54.9.26 ～9.30	70
文化書道千葉県連合会展	文化書道会の教育書道の本義に則り、県下の会員及び傘下の学童作品を展示して、その成果を問うた。	54.9.26 ～9.30	1,045
第 7 回 「明るく楽しい 家庭づくり」 作品展	国際児童年にあたり、県下小・中学校の児童・生徒の参加を求め、幅広くポスター標語を募集して、青少年健全育成に寄与することを目的とした。	54.10.2 ～10.7	430

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
フ ァ ン シ ー 展	会員の技術を深め、多くの人々に作品を鑑賞してもらい、批評を受け、今後の制作活動の糧とした。	54.10.2 ～10.7	100
第 26 回 千 葉 県 勤 労 者 美 術 展	県内勤労者が余暇を利用して創作した美術品の発表の場を提供することによって、文化的教養の向上をはかった。	54.10.2 ～10.7	240
第 22 回 千 葉 市 小 ・ 中 ・ 養 護 学 校 児 童 ・ 生 徒 作 品 総 合 展	書写・理科・図工美術・技術家庭・特殊教育・学校園4部門にわたり、市内児童・生徒の作品を公開し、一年間の作品評価を行うとともに、教師、児童・生徒、父母の啓蒙に資した。	54.10.9 ～10.18	625
千 葉 展	新象作家協会・独立美術協会・モダンアート協会・行動美術協会に所属する県内在住の作家による中央画壇の活気ある現代美術を広く県民に紹介した。	54.12.4 ～12.9	110
第 24 回 こ ど も 県 展	次代を担うこども達の美的情操を豊かにし、創造性を高めることを目的に、県内児童・生徒の絵画作品を一堂に展示した。	54.12.11 ～12.23	5,716
第 15 回 登 龍 社 ・ 宮 坂 会 書 初 展	書の古典に立脚し現代に創作して、伝統ある書初として展示し、書道の向上発展をはかった。	55.1.5 ～1.6	316
第 10 回 千 葉 県 大 学 美 術 連 盟 展	美術を媒体とし、各加盟サークル間の親睦をはかり、研究活動の集大成を多くの美術愛好家に批評してもらい、今後の糧とするとともに芸術文化の振興をはかった。	55.1.5 ～1.13	182
日 輝 展 選 抜 展	油彩・水彩・版画・日本画・墨絵・レザークラフト・写真等の作品を展示し、会員相互の融和と交流をするとともに、県内芸術文化の向上に資した。	55.1.15 ～1.20	90
葉 美 会 展	本館友の会員が創作の楽しみを分かち合いかつ実技講座や写生会等の成果を発表し、今後の糧とした。	55.1.15 ～1.27	136
第 32 回 千 葉 県 小 ・ 中 ・ 高 校 書 初 展	課題を統一募集し、地方で審査するとともに中央で席書を行い、習字・書道教育の向上と振興をはかった。	55.2.5 ～2.11	733

展 覧 会 名	内 容 等	会 期	展示点数
昭和54年度千葉大学教育学部美術科卒業制作展	卒業を目前にして4年間の美術科教育研究成果の一部を作品を通して発表し、世の多くの方々の御指導・御叱正を仰ごうとするものだった。	55.2.5 ～2.11	73
昭和54年度千葉大学教育学部書道科学生書道展	一年間の研究成果を卒業作品を中心に展示して、社会の文化の進展に寄与することを目指した。	55.2.5 ～2.11	92
こども造形展	幼児・児童の立体・平面の作品を発表し、彼らの意欲の増進と美術教育の研究を目的とした。	55.2.13 ～2.17	700
親子絵画展	親と子表現こそ異なる絵画に託した夢を作品として発表し、多くの方々に批評してもらい、かつコミュニケーションの輪を広げようと開催した。	55.2.13 ～2.17	201
第12回習美会新春展	一般入場者に自分の好きな作品を選んで投票してもらい、高得者順に奨励し、好きな作品を選ぶことによって一般観覧者も絵画観賞の心を養う目的とした。	55.2.19 ～2.24	266
第5回千葉県民写真展	アマチュアカメラマンが、その力量を競い合い、写真文化の発展と写真を通じて地域社会に貢献する精神の涵養を目的とした。	55.2.19 ～3.2	347
第11回千葉市民美術展	千葉市民よりの公募展であり、市民の芸術文化の振興と向上をはかった。	55.3.4 ～3.23	1,196
第27回書星教育部展	小・中・高校生の習字・書道の振興と技能向上のため半切による大作を指導し、併せて創作活動と作品鑑賞の両面の向上をはかった。	55.3.25 ～3.30	2,622

講演会

(1) 芹沢銈介の仕事

講師 大妻女子大学講師
金子量重氏

期 日 昭和54年4月21日

芹沢の作品は、形と色に対するすぐれた造形感覚と、模様を構成する力量やそれを導き出す確かな染色技術に基づくものであり、日本人の暮らしの中で脈打ってきた用の伝統に根ざしたものである。

私は芹沢作品を見るたびに、あの線と形の調和のとれた模様の美しさに魅せられる。芹沢は模様の本質を究め、自らの目で伝統の工芸品に目を向け、「自分ならどう作るだろうか」を深く考えて、煮つめた上で、作品に仕上げる。彼は洋の東西、新古を問わず、世界の工芸品、建築のジャンルまで目を向け、それらの品物から栄養を吸収している。

世の人は、芹沢銈介を指して静かな人だという。しかし、いわゆる好々爺ではない。頑固で妥協を許さないきびしい人である。そこにこそ老いを感じさせない、若々しい色と模様が生れてくる秘密がひそんでいるのではなかろうか。と語られた。

(2) 房総を訪れた作家

講師 信濃デッサン館長
窪島誠一郎氏

期 日 昭和54年10月6日

房総という土地は、作家たちに対しどのような影響を与えてきたのであろうか。幼年時代房総で育った窪島氏にとって「房総とは何か」ということについて、自身の体験を事例にとりながら語られ、さらに「村山槐象・安井曾太郎にとっては」と話をすすめられた。

作家にとって風土は、精神的発達の上で重要な役割を果たしているのではなかろうか。今日、作家と風土について、再認識すべきではなかろうかと結ばれた。

(3) 美術と私（県民アトリエ完成記念講演会）

講師 小説家
水上勉氏

期 日 昭和55年3月16日

水上氏は、まず大変貧しく家には電灯もつかず、寺にあづけられ苦労した子供の頃の話から始められた。その頃、特に絵に親しむ心というものは特別なかったが、寺に描かれている、豪華な孔雀の絵よりも、雁の親子の絵が心にひかれたとか、寺の修業時代に、ある寺で朝から晩まで「カボチャ」と「シャモ鳥」を描いていた絵書さんが今でも心に残っているなど、氏の絵に対する触れ合いの動機を淡々と、しかし卒直な言葉で話された。



講習会

「みる・かたる・つくる」という本館の事業の一環として、実技講座を実施しているが、本年度は、次の講座を行った。

(1) デッサン入門講座

期 日 第1期 昭和54年 6月 9日・10日

第2期 昭和54年 7月 7日・ 8日

講 師 第1期 千葉大学助教授 太田 洋三氏

第2期 千葉大学教授 海老沢巖夫氏

参加者数 各期40名

内 容 初心者を対象として、形や明暗のとらえ方、質感や量感の把握など石膏像をモデルにして絵画表現の基礎的な学習を目的として行った。



(2) てん刻入門講座

期 日 第1期 昭和54年 8月25日・26日

第2期 昭和55年 2月23日・24日

講 師 第1期・第2期とも

日展審査員 古川 悟氏

謙慎書道会評議員 白取 弘苑氏

参加者数 各期40名

内 容 てん刻の歴史やその美についての講座の後、自分の名前を印材に書き、刻する作業を行った。その過程で技法や材料についての知識を得るという初心者のための基礎講座であった。



(3) 七宝焼講習会

期 日 昭和55年 3月26日・27日

講 師 千葉大学教授 長南 光男氏

参加者数 30名

内 容 七宝焼は、アクセサリや室内装飾品として、その利用は多彩であり人気も高い。七宝焼の制作技法を習得し、自らが作り使う喜びを味わうことのできる基礎講座であった。



美術を語る会

美術普及事業の一環として、美術一般に関する問題をテーマに“語り合い”の中から、作家や作品をはじめ展覧会にともなう知識や理解を深める談話会「美術を語る会」を定期的に開催し、“美の広場”の充実をはかることに意義つけている。

第1回 昭和54年5月5日

話題提供者 本館職員

テーマ 「芹沢銈介展」を見て

芹沢銈介展にともない、型絵染の創始者であり、重要無形文化財保持者である彼の作品を見、その芸術性や人となり、またその技法について理解を深めながら、独創性に富んだ“芹沢模様”について語りあった。

第2回 昭和54年7月28日

話題提供者 千葉大学助教授 戸田 健夫氏

テーマ 風景と作家

展覧中の「日本の風土」展を素材に、モチーフとしての風景を描くこと、日本の風土と日本人の感受性に触れながら、語り合いの材料を表情豊かに提供された。

第3回 昭和54年9月29日

話題提供者 本館副館長 高橋 在久

テーマ 原風景としての房総

房総を訪れた巨匠たち展にともない、房総の地が日本近代洋画史のなかで写生地として脚光を浴びた事実根ざし、作品の発生成間や作家の生活形成空間を分析し、ひとつの視点として原風景に触れることを提言した。

第4回 昭和54年11月10日

話題提供者 美術評論家 中村傳三郎氏

テーマ 初期県展にみる作家たち

我が国における本県の県展の占める位置についてを中心に、さらに美術の見方・考え方などにまで話を進展させ、また、本年度の県展作品についても話し合いが行われた。

第5回 昭和55年1月19日

話題提供者 板倉弘子氏

テーマ 板倉鼎を語る

板倉鼎展にともない、実妹である氏により鼎の人物となりやパリで活躍中のことなど、今まで多くを語られることのなかった鼎のことが浮きぼりされた。明るい色彩感・平易な画面に魅せられた女性参加者が多かった。

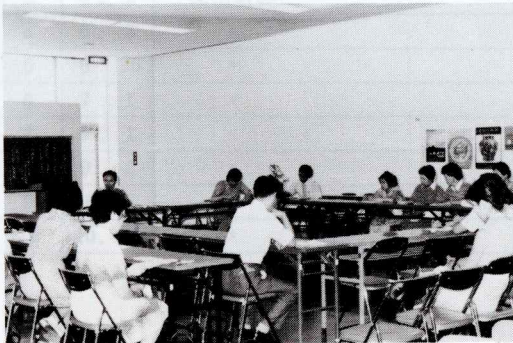
第6回 昭和55年3月22日

話題提供者 東京国立文化財研究所主任研究官

陰里 鐵郎氏

テーマ 水彩画の再発見

特別展「水彩画の再発見」の開催にともない、水彩画の定義、その歴史について語られた。特に、導入から定着されて行った過程について詳しく述べられ、近代日本の絵画の、あるひとつの流れを示され、意義深い内容であった。



第2回



第5回

第3回 美術館夏季大学 —美術入門講座—

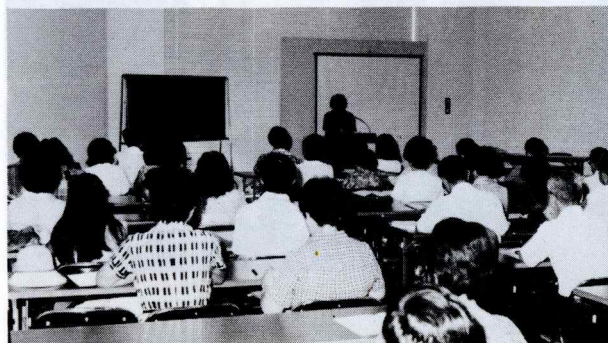
わが国の近代洋画史に焦点を当て明治・大正・昭和の各時代の特色ある活動を取り上げながら、世相のうつりかわりと対比させつつ、その芸術運動の意義の理解を中心に、あわせて日本近代洋画史における千葉県の位置づけをテーマに開講した。

期 日 昭和54年8月3日・4日

参加者数 81名

内 容

日 時	講 師	課 題	内 容	日 時	講 師	課 題	内 容
8月3日 午前	朝日 晃 (東京都美術館事業課長)	作家の中のヨーロッパ美術への自覚～佐伯祐三を中心として～	1 学生期の理解 2 渡欧後の動揺 3 次の滞欧後の転回 4 死の前の結日	8月4日 午前	高橋 在久 (本館副館長)	日本洋画史の中の房総	1 写生地としての房総の風景 ① 多彩な地形と景觀 ② 写生者とその結晶 2 脚光をあびた波太海岸 ① 歴史とその動機 ② 画家の宿の形成史 3 画家の宿とその作品 ① 宿泊写生した画家たち ② 画家の宿で生まれた作品
午後	植村鷹千代 (美術評論家)	前衛美術の先駆者たち	1 大正期の状況 ① 大正初期におけるヨーロッパ前衛美術の紹介者としての二科会の功績(石井柏亭その他の紹介) ② 大正末期におけるマブオ、三科運動など 2 昭和期(戦前)の状況 ① 昭和10年頃の状況 ② の先駆的状況と作家たち(街頭展の時代) ③ 昭和12年～14年代自由美術・美術文化・二科九室会の作家たちと活動状況について 3 戦後の前衛運動をリードした作家たちの円熟	午後	田中 穰 (読売新聞社編集委員)	日本洋画の夜明け	1 浅井忠と「明治美術会」 2 黒田清輝の帰国 3 「天真道場」「美校西洋画科」「白馬会」 4 「脂派」対「紫派」 5 浅井忠の「関西美術院」 6 京都洋画の復興



朝日氏による講義

洋画実技講座

友の会との共催で行われたもので、美術館の“つくる”活動の一つとして制作の楽しみを味わいながら、年間を通じ系統的な実技指導を行った。本年は基礎コース（初心者）と研修コース（経験者）とに分けて実施した。

(1) 基礎講座

講師 千葉県立船橋高等学校教諭 根岸茂行氏

参加者数 35名（各回同一人）

日程及び講習内容

回	月 日	講 習 内 容
1	4. 14	石膏デッサン
2	5. 19	"
3	6. 23	静物着彩
4	7. 14	裸婦クロッキー
5	7. 15	裸婦デッサン
6	8. 18	裸婦着彩
7	8. 19	"
8	9. 8	"
9	9. 9	"
10	10. 27	静物着彩



(2) 研修講座

講師 千葉大学教授 武内和夫氏

参加者数 35名（各回同一人）

日程及び講習内容

回	月 日	講 習 内 容
1	4. 8	人物クロッキー（コスチューム）
2	5. 20	裸婦デッサン
3	6. 2	裸婦着彩
4	6. 3	"
5	6. 30	"
6	7. 1	"
7	9. 1	"
8	9. 2	"
9	10. 7	"
10	10. 7	"



見学会

友の会と共催で行われ、美術作品や文化財をたずねながら同好の親睦を深めるものである。

(1) バスは緑の風をのせて

期 日 昭和54年5月24日

参加者数 100名

風薫る五月晴れの恵まれた一日、葛飾柴又の帝釈天、今も昔も醤油の町である野田の醤油工場、郷土資料館、みりんの町である流山の郷土資料館を訪ね、膨大な永井コレクションを鑑賞した。



(2) 伊香保・榛名湖畔の自然美と美術館・博物館を訪ねて

期 日 昭和54年11月17日・18日（1泊2日）

参加者数 45名

うす曇りの1日目、秋雨に煙る2日目、天候にこそ恵まれなかったが、栗田美術館では、鍋島・伊万里などの陶磁器の美に魅せられ、群馬の森では、群馬県立近代美術館で常設展やら群馬県展を見、開館間もない群馬県立歴史博物館では、群馬の歴史と文化財に触れることができた。



VOL. 6 No. 1 (54.4.15発行 8頁)

目次 ・観潮台

- ・新年度を迎えて抱負を語る
- ・特別展「芹沢銈介展」
- ・型染めの技法・型絵染
- ・常設収蔵作品展
- ・てん刻入門講座を終えて
- ・美の泉「長谷川昂」

VOL. 6 No. 2 (54.6.20発行 8頁)

目次 ・観潮台

- ・現代洋画界の巨匠78名の作品による「日本の風土」展開催
- ・芹沢銈介展を終えて—アンケートより—
- ・夏の日に美術鑑賞を一第3回千葉県移動美術館
- ・カナダの自然や生活を版画で—カナダ風景画展
- ・美の泉「表現の特色」

VOL. 6 No. 3 (54.8.30発行 8頁)

目次 ・観潮台

- ・特別展「房総を訪れた巨匠たち」
- ・原風景を視点に
- ・夏季大学終わる
- ・筑波日記を刊行
- ・好評のてん刻講座
- ・収蔵品紹介—大久保作次郎作「丘上の鐘楼」
- ・美の泉「表現の特色—山水画・風景画」

VOL. 6 No. 4 (54.12.13発行 8頁)

目次 ・観潮台

- ・美に生きた永遠の青春板倉鼎展
- ・収蔵作家50人展
- ・第31回県展より
- ・「県民アトリエ」の活動に望む私たちの声
- ・美の泉「古墳の造形物」

VOL. 6 No. 5 (55.3.10発行 8頁)

目次 ・観潮台

- ・明治・大正・昭和の歩み—「水彩画の再発見」
- ・待望の県民アトリエ完成
- ・美の泉「外国人の見た日本美術」

VOL. 6 No. 6 (55.3.26発行 8頁)

目次 特集県民アトリエ完成記念

- ・県民アトリエの完成をめぐり考えること
- ・「かたる・つくる」の拠点として県民アトリエ完成する
- ・県民アトリエ完成記念講演会感動のうちに終了
- ・近代日本美術の巨匠展
- ・美の泉「中西利雄『四人の女』」



友の会(葉美会)

(1) 運営方針

- ①“みる・かたる・つくる”美術館活動に積極的参加の促進
- ②会員加入の促進(目標1,000名)
- ③県民アトリエの建築促進

(2) 組織

人数 会員数 1,101名

名称 千葉県立美術館友の会

●千葉県立美術館友の会役員

職名	氏名	分担
顧問	浅見喜舟	
名誉会員	松戸節三	
会長	鈴木民三	
副会長	市原正夫	
"	永田澄子	事業
"	江尻幹雄	親睦
事務局長	大里功	総務
監事	始関妙	広報
"	三宅寿美子	親睦
"	高梨義男	
理事	安田博亮	総務
"	新城瑠璃子	"
"	田中環	事業
"	押尾楨一	広報
"	平野元三郎	親睦
"	村上十吉	事業
"	大藤敬美	親睦
"	石井秀雄	
"	高橋在久	
"	大木衛	
評議員	大高鐘蔵	
"	木内俊雄	
"	安達園子	
"	横沢正雄	

職名 氏名

評議員	高橋喜一郎
"	芳垣良一郎
"	酒井千代子
"	日暮幸子
"	松本康雄
"	西田葆
"	高宮知代
"	植木照
"	加藤信子
"	長谷川芳衛
"	近藤愛子
"	広瀬慶子
"	湯浅幸一
"	村井和正
"	林美貴枝
"	中村幸子
"	小室守一
"	渡辺美智子

(3) 事業

①友の会報(しおさい)の発行および、講演会、講習会、美術を語る会、見学会を本館と共催で行った。

②第4回葉美会展

会期 昭和55年1月15日～1月27日

展示点数 136点

実技講座での作品や家事や勤務の合間に製作した苦心の力作を持ちより、“つくる”活動から“みる”“かたる”活動を通して、美術愛好者の親睦を深め、楽しさを分かち合う機会とした。

また、展覧会最終日には日頃指導にあたってくれている武内和夫氏を囲み、作品の合評会が行われた。

No.17 (53.5.28発行 8 頁)

目次・洋画基礎講座の開講にあたって

- ・新年度を迎えて想うこと (館長)
- ・会員の皆様へ (友の会長)
- ・県民アトリエいよいよ着工
- ・ミニミニニュース
- ・浅見喜舟先生の「書の見方習い方」のご講演から
- ・昭和54年度美術館展覧会事業のご案内
- ・友の会理事会・評議会開く
- ・べにばな染の連想
- ・「日本の風土」展あんない

No.18 (53.7.25発行 6 頁)

目次・デッサン入門

- ・バスは緑の風をのせて—美術と文化財を訪ねるバスの旅
- ・模写「落穂拾い」について
- ・美術館歳時記1 「海辺の風景」

No.19 (53.9.25発行 6 頁)

目次・彫る喜び、使う楽しみ—「てん刻入門講座」ひらく

- ・「房総を訪れた巨匠たち」
- ・美術館歳時記2 「鶴原風景」
- ・ミニミニニュース
- ・“美術を語る会”に参加して
- ・美術館紹介<1> 白浜海洋美術館

No.20 (53.11.28発行 6 頁)

目次・個性豊かな作品を

- ・伊香保・榛名湖畔の自然美と群馬・栃木美術館
- ・博物館を訪ねて
- ・意欲的に取り組む—洋画各種実技講座終了—
- ・美術館紹介<2> 梅沢記念館・永青文庫・遠山記念館・草雲美術館

No.21 (55.2.1発行 6 頁)

目次・特別展「水彩画の再発見」

- ・若くしてパリに死す—「板倉鼎展」ひらく
- ・葉美会展、盛況裡におわる
- ・美術館歳時記<3> 「画家の宿」
- ・美術という新語を作った人

No.22 (55.3.22発行 6 頁)

目次・特別展「近代日本美術の巨匠展」について

- ・葉美会展を顧みて
- ・二つの大きな出来事 (館長)
- ・県民アトリエ完成
- ・昭和55年度美術館展覧会事業
- ・友の会理事会開く
- ・美術館歳時記<4> 「近代日本洋画史のルーツ」



昭和54年度事業一覧

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
4	<p>常設収蔵作品展 「風景の美」</p>	<p>・美術講演会(4/21) テーマ 芹沢銈介の仕事</p>	<p>第6回全日本書の友の会一般部・学生部書道展 (4/10～4/15) 第2回千葉新芸術展 (4/17～4/22) 千葉工芸展 (4/24～5/6)</p>
5	<p>特別展 芹沢銈介展 ーその創造のすべてー</p>	<p>・第1回美術を語る会(5/5) ・春の美術鑑賞の旅(5/13)</p>	<p>千葉新協展 (5/2～5/6) 第5回歩会彫刻展 (5/2～5/13) 等迦会千葉支部展 (5/8～5/13) 第24回二科千葉支部展 (5/15～5/20) 千葉市アマチュア美術クラブ展 (5/15～5/20) 墨の県展 (5/22～5/27) 表美展 (5/29～6/3)</p>
6	<p>常設収蔵作品展</p>	<p>・デッサン入門講座(1期) (6/9～10)</p>	<p>一陽会千葉支部展 (6/5～6/10) 千葉県書道協会展 (6/5～6/10) 千葉県写真家協会展 (6/12～6/17) 第7回書壇秀抜展 (6/19～7/1)</p>
7	<p>20ー現代洋画界の 巨匠78名によるー 日本の風土</p>	<p>・デッサン入門講座(2期) (7/7～8) ・第2回美術を語る会(7/28)</p>	<p>千葉市水墨画同好会連合会展 (7/3～7/8) 千葉美術シンポジウム&青枢展 (7/10～7/15) 千葉盲学校陶芸展 (7/17～7/22) '79精鋭展 (7/17～7/29)</p>
8	<p>カナダ風景画展</p>	<p>・第3回美術館夏季大学 (8/3～4) ・てん刻入門講座(1期) (8/25～26)</p>	<p>現代美術水か魚か展 (8/14～8/19) 子どもと教師の作品展 (8/21～8/26) 第8回日本習字千葉県書道展 (8/21～8/26) 第9回いてふ会彫刻展 (8/21～9/2) 第7回千葉市教職員美術展 (8/28～9/2)</p>
9	<p>千葉県移動美術館 (成田国際文化会館)</p> <p>千葉県移動美術館 (銚子市役所市民ホール)</p> <p>特別展 房総を訪れた巨匠たち</p>	<p>・第3回美術を語る会(9/29)</p> <div> <p>友の会 洋画実技基礎講座(会員制) 4/14、5/19、6/23、7/14・15、 8/18・19、9/8・9 洋画実技研修講座(会員制) 4/8、5/20、6/2・3、6/30、 7/1、9/1・2</p> </div>	<p>第5回児童合同美術展 (9/4～9/9) 第8回写真千葉県展 (9/4～9/17) 第19回白扇書道会展・全国学生書道展 (9/11～9/16) 千葉'79展 (9/18～9/24) 第9回新構造千葉支部展 (9/26～9/30) 文化書道会千葉県連合会書道展 (9/26～9/30)</p>

月	本館企画の展覧会	普及事業	団体展
10	特別展 房総を訪れた巨匠たち 18	・美術講演会(10/6) テーマ 房総を訪れた作家	昭和54年度ファンシー展 (10/2~10/7) 第26回千葉県勤労者美術展(10/2~10/7) 第7回「明るく楽しい家庭づくり」作品展 (10/2~10/7) 第22回千葉市小・中・養護学校児童・生徒 作品総合展 (10/9~10/18) 第31回県展 (10/27~11/18)
11		・第4回美術を語る会(11/10) ・秋の美術鑑賞の旅(11/17~18) (群馬・栃木方面)	第11回千葉県高等学校芸術祭 美術・工芸・書道作品展(11/22~12/2) 昭和54年度千葉県芸術祭参加 写真展 (11/22~12/2)
12	7 常設収蔵作品展		千葉展 (12/4~12/9) 第24回こども県展 (12/11~12/23)
1	5 房総の美術家シリーズ(8) 板倉 鼎 3	・第5回美術を語る会(1/19) 友の会 洋画実技基礎講座(会員制) 10/27 洋画実技研修講座(会員制) 10/7	第15回登龍社・宮坂会書初展 (1/5~1/6) 第10回千葉県大学美術連盟展 (1/5~1/13) 日輝展選抜展 (1/15~1/20) 葉美会展 (1/15~1/27)
2	15 19 特別展 ~明治・大正・昭和の 歩み~ 水彩画の再発見	・てん刻入門講座(2/26~27)	第32回千葉県小・中・高校書初展 (2/5~2/11) 昭和54年度千葉大学教育学部美術科卒業 制作展 (2/5~2/11) 昭和54年度千葉大学教育学部書道科学生 書道展 (2/5~2/11) 第4回子ども造形展 (2/13~2/17) 第12回習美会新春展 (2/19~2/24) 第5回千葉県民写真展 (2/19~3/2)
3	23	・七宝焼講習会(3/6~7) ・県民アトリエ完成記念講演会 (3/16) ・第6回美術を語る会(3/22)	第11回市民美術展 (3/4~3/24) 第27回書星教育部展 (3/25~3/30) 第6回弥生展 (3/25~3/30)

利用状況

昭和54年度入館者一覧表

昭和55年 3月31日現在(54.4.1～55.3.31)

種 別 月	開館 日数	個 人			団 体		体				人 数 合 計	備 考
		一般成人	大・高生	中・小生	一般成人		大・高生		中・小生			
					人 数	団数	人 数	団数	人 数	団数		
4	日 24	人 5,854	人 311	人 1,741	人 281	3	人 35	1	人 180	4	人 8,402	特別展 「芹沢銈介展」
5	26	9,833	816	2,303	164	4	303	3	985	7	14,404	
6	26	5,264	102	699	573	12	122	3	178	2	6,938	
7	26	5,782	278	975	182	5	44	2	223	5	7,484	
8	27	4,933	316	1,584	171	3	0	0	120	3	7,124	
9	26	8,196	580	4,567	164	5	124	2	323	1	13,954	特別展 「房総を訪れた 巨匠たち」
10	19	9,158	554	7,736	460	12	0	0	1,861	15	19,769	
11	24	12,575	1,186	3,439	453	11	976	5	159	2	18,788	
12	20	6,832	613	3,860	366	10	0	0	231	6	11,902	
55年 1	23	4,336	466	818	172	3	0	0	248	1	6,040	
2	25	7,568	720	3,155	119	3	0	0	487	4	12,049	特別展 「水彩画の再発見」
3	26	10,312	775	4,489	142	3	29	1	368	7	16,115	
計	294	90,643	6,717	35,366	3,247	74	1,633	17	5,363	57	142,969	1日平均486人(54年度)
累計	1,534	678,004	(開館以来)									1日平均441人

地域別入館者状況

昭和55年 3月31日現在(54.4.1～55.3.31)

種 別 月 別	開館日数 (日)	県 内		県 外		そ の 他	
		千葉市(人)	その他の県内(人)	東京都(人)	その他の県外(人)	外国(人)	不明(人)
4	24	5,348	2,509	254	247	44	0
5	26	8,379	4,983	641	398	3	0
6	26	4,306	2,297	227	103	5	0
7	26	4,942	2,148	216	137	41	0
8	27	4,683	2,042	196	194	9	0
9	26	8,632	4,883	251	178	10	0
10	19	15,866	3,540	181	154	28	0
11	24	10,048	8,099	436	202	3	0
12	20	5,068	6,635	128	62	9	0
55年 1	23	3,758	2,072	110	74	26	0
2	25	7,773	3,921	196	159	0	0
3	26	10,120	5,547	255	181	12	0
計	294	88,923	48,676	3,091	2,089	190	0
累計		137,599		5,180		190	

日誌抄

- 4月9日 茨城県教育委員会より来館
 18 三重県教育委員会より来館
 19 特別展「芹沢銈介展」始まる
 21 講演会「芹沢銈介の仕事」金子量重氏
 25 千葉県立美術館・博物館協議会
 28 友の会総会
- 5月2日 千葉県博物館協会役員会
 5 第1回美術を語る会
 11 山口県立美術館より来館
 13 春の美術鑑賞の旅
 17 千葉県博物館協会役員会及び総会
 19 芹沢銈介氏御夫妻来館
 23 埼玉県文化行政課美術館準備班より来館
 24 常設収蔵作品展始まる
- 6月9・10日 第Ⅰ期デッサン入門講座
 19 千葉県立美術館協議会
 福島県教育委員会より来館
 29 東京都豊島区教育主任会職員研修所研修生一行来館
- 7月7・8日 第Ⅱ期デッサン入門講座
 10 千葉県立美術館・博物館庶務課長会議
 13 博物館実習始まる
 20 企画展「日本の風土」始まる
 24 監査委員定期監査
 福岡市議会議員一行来館
 神奈川県教育委員会社会教育部長来館
 26 東京都板橋区立美術館より来館
 28 第2回美術を語る会・千葉県立美術館研究員会議
 31 企画展「カナダ風景画展」始まる
 カナダ大使館より来館
- 8月1日 福岡県文化会館管理部長来館
 3・4 第3回美術館夏季大学
 16 千葉県移動美術館始まる（成田市国際文化会館）
 25・26 第Ⅰ期てん刻入門講座
- 9月1日 千葉県移動美術館始まる（銚子市役所市民ホール）
- 29 第3回美術を語る会
- 10月5日 茨城県企画室より来館
 6 講演会「房総を訪れた作家」窪島誠一郎氏
 15 千葉県美術館資料審査委員会
 21 鈴木文部省大臣官房審議官来館
 23 千葉県立美術館協議会
 24 千葉県博物館協会役員会
 27 第31回県展始まる
 31 関東地区博物館協会調査研究委員会
- 11月6日 茨城県総合開発審議会委員一行来館
 10 第4回美術を語る会
 17・18 秋の美術鑑賞の旅
- 12月2日 埼玉大学博物館実習
 7 常設展「収蔵作家50人展」始まる
 日立市郷土博物館より来館
 14 鈴木文部省大臣官房審議官来館
 千葉県立美術館・博物館協議会
- 1月5日 企画展「板倉鼎展」始まる
 10 オーストラリア視察団一行来館
 17 岐阜県美術館準備室より来館
 19 第5回美術を語る会
 22 青森県教育庁文化課より来館
 23 福島県いわき市教育委員会より来館
- 2月5日 美術館資料審査委員会
 14 北海道住宅都市部工営課より来館
 長崎県立美術館より来館
 16 岐阜県東京事務所長来館
 19 特別展「水彩画の再発見」始まる
 23・24 第Ⅱ期てん刻入門講座
- 3月8日 兵庫県立近代美術館より来館
 11 京都国立近代美術館より来館
 13 関東地区博物館協会理事会
 16 県民アトリエ完成記念講演会「美術と私」
 水上勉氏
 18 千葉県博物館職員研修会
 22 千葉県立美術館研究員会議
 第6回美術を語る会

関係令規

1. 博物館管理規則

昭和45年12月25日教育委員会規則第22号

目 的

第1条 この規則は、教育機関設置条例（昭和32年千葉県条例第4号）第20条に規定する博物館（以下「館」という。）の管理に関し必要な事項を定めるものとする。

（開館時間）

第2条 館の開館時間は、午前9時から午後4時30分までとする。

2. 館の長（以下「館長」という。）は、必要があると認めるときは、前項の規定にかかわらず、開館時間を変更することができる。

（休館日）

第3条 館の休館日は、次のとおりとする

一 定期休館日 月曜日（その日が国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）第2条に規定する日に当たるときは、その翌日）

二 国民の祝日に関する法律に規定する日

三 年末休館日 1月1日から1月4日まで

四 年末休館日 12月26日から12月31日まで

五 臨時休館日 特別の事情により、館長が休館を必要と認めた日

2. 前項の休館日であっても、館長が特に必要と認めた場合は、館の全部又は一部を開館することができる。

（入館の制限）

第4条 館長は、次の各号の一に該当する者に対して入館を禁じ、又は退館を命ずることができる。

一 特別展覧会を観覧しようとする者で、所定の観覧券を所持しないもの

二 適当な指導者、保護者又は付添人のない6歳に満たない者

三 でい酔者、伝染病患者その他観覧者に不快の感を与えると思われる者

（観覧券等）

第5条 館の特別展覧会観覧券は、別記第1号様式とする。

2. 団体（20人以上の場合をいう。）で観覧しようとするときは、あらかじめ団体観覧申込書（別記第2号様式）により、館長に申し込まなければならない。

（禁止行為）

第6条 入館者は、次に掲げる行為をしてはならない。

一 展示品に手をふれること及び展示室でインク、墨汁類を使用すること。

二 許可なくして展示品を模写し、又は撮影すること。

三 所定の場所以外の場所において喫煙又は飲食すること。

四 その他他の入館者の妨げになるような行為をすること。

（損害の賠償）

第7条 館長は、入館者が館の展示品、建物若しくは備品等をき損し、又は汚損したときは、現品又は相当の代価をもって弁償させることができる。

（委 任）

第8条 この規則の施行に関し必要な事項は、教育長の承認を得て、館長が定める。

附 則

この規則は、昭和46年1月15日から施行する。

別記様式（省略）

2. 使用料及び手数料条例（抜粋）

昭和31年3月31日条例第6号

（趣 旨）

第1条 県が徴収する使用料及び手数料（以下「使用料等」という。）に関しては、別に規定するもののほか、この条例の定めるところによる。

（使用料等の徴収）

第2条 県が所有し、又は管理する行政財産及び公の施設（以下「財産等」という。）の使用並びに特定の個人のためにする事務（以下「事務」という。）に関し、法令及び他の条例に規定するもののほか、当該事務を依頼しようとする者から手数料を徴収するものとする。

（種類及び額）

第3条 前条の規定により使用料等を徴収する財産等及び事務の種類並びにその使用料等の額は別表第一に掲げるとおりとする。

（中 略）

別表第一（第3条第1項抜粋）

財産又は事務の種類	手数料	区 分	単 位	額
博 物 館	入場料	特別展覧会	1人1回 に つ き	300円 以内

（以下略）

3. 展示室使用料

昭和50年4月1日千蔵県教育委員会指示第71号

1. 千葉県立美術館展示室の使用料については、使用及び手数料条例第5条第3項に基づき減免することとし、当分の間次表のとりの額とする。

室 名	面 積	使 用 料 午前9時から午後5時まで	
		観覧料無料、 展示物販売を しない場合	観覧料有料又 は展示物販売 をする場合
第一展示室	438㎡	4,000円	左の倍額
第二展示室	400	4,000	〃
第三展示室	469	4,500	〃
第四展示室	403	4,000	〃
第五展示室	824	8,000	〃
第六展示室	330	3,000	〃
第七展示室	567	5,500	〃
全 室	3,431	33,000	〃

ただし、県及び県教育委員会が共催ないし後援する場合並びに国又は他の地方公共団体の主催ないし共催する行事に係る使用の場合は無料とし、その他県教育委員会教育長が特に教育的文化的意義を認める行事に係る使用の場合は上記の半額とする。

2. 千葉県立美術館展示室の使用の許可に関する取扱いは、別紙「千葉県立美術館展示室の使用許可に関する取扱要綱」によるものである。

●千葉県立美術館友の会会則

(名 称)

第1条 本会は、千葉県立美術館友の会という。(略称、葉美会)(事務所)

第2条 本会は、事務局を千葉県立美術館内におく。(目 的)

第3条 本会は、千葉県立美術館(以下「館」という。)の活動に協力し、楽しいふんい気のなかで、教養を豊かにし、美術文化の向上をはかり会員相互の親睦を深めることを目的とする。(事 業)

第4条 本会は、前条の目的を達成するため次の事業をおこなう。

- 1 館の展覧会の見学鑑賞
- 2 講演会、講習会、研究会等
- 3 館外見学会
- 4 機関紙等の編集発行
- 5 その他目的達成に必要な事業

(会 員)

第5条 本会は、会の目的に賛同するものをもって組織する。

1. 会員には次の特典がある。

- ①館の主催又は共催による展覧会観覧の優待
- ②美術館報「みる・かたる・つくる」ならびに友の会機関紙の配布
- ③本会発行の図録等の配布及び割引購入
- ④本会事業への参加

2. 本会活割に協力し、賛助会費を納めたものは賛助会員とする。(会員の加入・退会)

第6条 本会に加入する場合は申込書に入会金(500円)を添えて事務局に提出し、会員証の交付を受ける。退会届際は退会届を提出する。

(役 員)

第7条 本会に次の役員をおく。

会長1名 副会長3名(ただし内1名は美術館長があたる)

理事 若干名 事務局長 1名 監事2名 評議員 若干名

1. 会長・副会長・理事・事務局長・監事の選出は評議員会において推挙する。

2. 役員の任期は2年とする。ただし再任は防げない。

(役員等の任務)

第8条 本会の役員の任務は次のとおりとする。

1. 会長は本会を代表して会務を総理し、会議を召集し、その議長となる。

2. 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代理する。

3. 理事は会の運営にあたる。

4. 事務局長は会務を処理する。

5. 監事は本会会計の監査をする。

(顧問・名誉会員)

第9条 この会に顧問及び名誉会員をおくことができる。顧問及び名誉会員は評議員会で推挙する。

(支 部)

第10条 地域、並びに職域ごとに20名以上の会員を有する場合は支部をおく。

(評議員会)

第11条 各支部より20名につき1名の制で推せんされた代表と賛助会員及び講座代表をもって評議員会を構成する。評議員会は毎年1回以上開き、事業計画、予算、役員の決定その他の重要方針を決議する。

(会費)

第12条 本会の普通会員は毎年度当初に年額1500円の会費をを納入する。

1. 5月以降の入会者については1ヵ月ごとに100円を通減するものとする。ただし通減金額は900円を限度とする。

(経 費)

第13条 本会の経費は会費、寄附金、事業収益金、その他の収入をもってあてる。

(会計年度)

第14条 本会の会計年度は毎年4月1日にはじまり、翌年3月31日におわる。

(職 員)

第15条 本会の事務局職員は館に勤務する者以外から、会長が委嘱する。

(付 則)

1. 本会の会則は評議員会で出席者の過半数の同意を得なければ変更することができない。

2. 本会則は昭和50年6月28日より施行する。

●昭和51年5月29日一部改正 ●昭和52年4月21日一部改正

●昭和53年4月20日一部改正

利 用 案 内

- 開館時間** 午前9時より午後4時30分まで
- 休 館 日** ・月曜日（ただし、月曜が祝日のときは開館し、翌日休館）
 ・年末年始（12月26日～1月4日）
 ・展示替等のため、必要があるとき。
- 入 場 料** ・無料（ただし、特別展は有料）
- 団体観覧** ・団体に来館されるとき、あらかじめご連絡あれば作品等の解説をします。

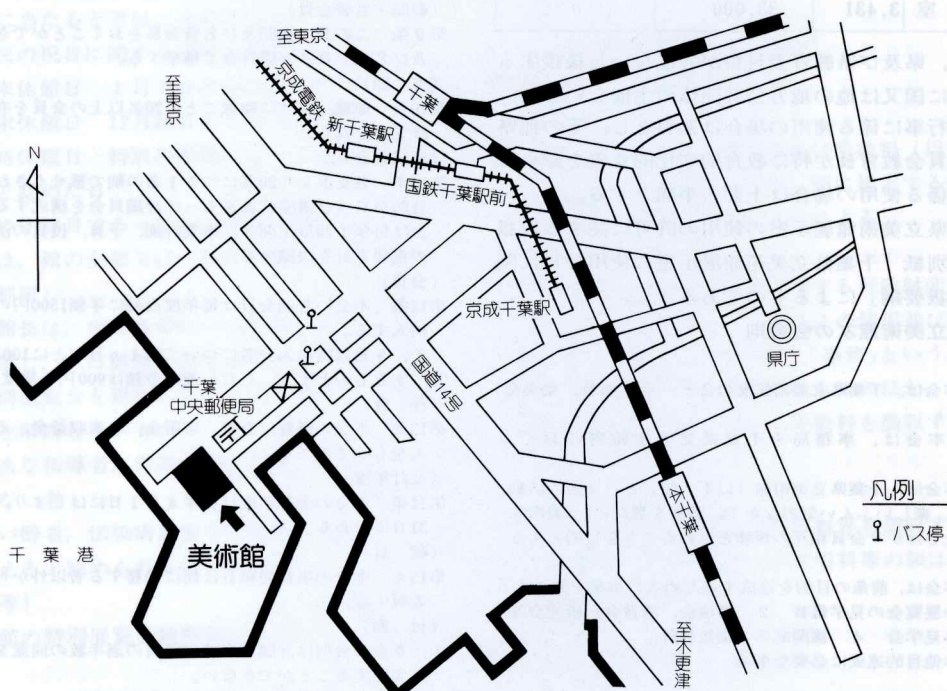
交 通 案 内

国鉄千葉駅前バス停③④番より「千葉市役所行」小湊京成、中央各バスで終点下車、徒歩約10分・⑦番「新港行」小湊、京成バスで中央署前下車、徒歩約6分

※日曜・祝日に限り下記のとおりバスが運行されています。

千葉駅発・そごうデパート前	美術館発・玄関北側
9 : 40	9 : 55
10 : 10	10 : 25
10 : 40	11 : 00
11 : 15	12 : 25
12 : 40	12 : 55
13 : 10	13 : 25
13 : 40	14 : 20
14 : 35	14 : 50
15 : 05	15 : 30
15 : 45	16 : 00

案 内 図



みる・かたる・つくる

千葉県立美術館年報(昭和54年度)

発行 千葉県立美術館

〒260 千葉市中央港1-10-1

TEL 0472 (42) 8 3 1 1

印刷 正文社





